

セカイにひとり

中(四)

麦(穀物P)

第一部

セカイにひとり

第七章 ひまわり畑で見つけたら

(World Line Kigumi-C to Kigumi-B via Maya)

木組みの街の夜景を見つつ、みんなでラビットハウスに帰ってきた。ドアを開けると、ちょうど店仕舞^{みせじま}いを進めていたところだったみたいで、サキさんがホール、タカヒロさんがカウンターにいた。

私達に気づいたサキさんが笑顔で出迎えてくれた。

「あらみんなお帰りなさい！ 意外と早かったわね。今日は千夜ちゃんとシャロちゃんも来てくれたのね」

「ただいま帰りました！」

「邪魔します」

この世界で新たに増えたシャロちゃんを見て、サキさんやタカヒロさんがどう思うのか注意して見ていたけど、特に違和感を持たれることはなかった。むしろシャロちゃんの方が、いきなり『よく知らないお姉さん』に親しげに挨拶されて戸惑っていた。サキさんが離れた隙すきに、私にヒソヒソ声で尋ねてきた。

「あのお姉さん風の方がさつき話してたサキさん？」

「うん」

「思った以上にチノちゃんにそっくりね……」

「そうだよな。記憶が戻った後に初めて見たら、チノが大きくなったのかと

思つてびっくりした覚えがある」

シャロちゃんがシンキングタイムに入つてそう経たないうちに、サキさんがレモネードを持ってきてくれた。外が少し暑くなり始めているので、よく冷えたレモネードがいつもより一際美味ひときわしかった。

お店の片付けの邪魔になるといけないので、全員で私の部屋に移動した。みんなが一息ついた頃、近くをびよんぴよん跳ねていたティッピーから不意に声が出た。

『作戦会議をしよう……』

低い声だったけど、このティッピーから声を伝えてくるのはただ一人、並行世界の私・ココアお姉さん（仮）だけしかいないので正体はすぐに分かった。

「っ！ 急に低い声で宣言するからびっくりしたぞ」

『ちよつとやってみたかったんだ♪ 四天王の会議みたいな宣言』

「確かにここにいるのはちょうど四人だけだな……でも姉ココアも入れたら五人だぞ」

『四天王が五人いるのはよくある話だよ？ あ、私がつとえらい人になれば、ちょうどみんなが四天王になるからそっちがいい？』

「そこは無理やり四天王になるんじゃないやなくて、五で始まる何かがないのか？」

『昔読んだ何かの小説に何かあった気はするんだけどね……』

「とりあえず、五人の四天王ということでもいいんじゃないかしら？」

千夜ちゃんの鶴の一声で話は一旦終わった。四天王の話はとりあえず横に置くことにした。

まず話し合うべきことは、残る三人——チノちゃん、マヤちゃん、メグちゃんをどのように探すかだった。

「私達の心当たりには相変わらず手がかりが無いんだよね……」

「チノならココアとずっと一緒だったし、このラビットハウスを家捜ししたら何か手がかりは見つかりそうなんだが」

「マメちゃんズのこととは分かっているようで、実はあまり知らなかったって気づいたのよね」

言われてみれば、私もマヤちゃんとメグちゃんのことがよく分からなかった。

一応、メグちゃんのお母さんがしているバレエ教室には二回行ったことがある。最初はチノちゃん、マヤちゃん、メグちゃんが学校の授業で創作ダンスの課題を仕上げるために特訓していたのを応援しに行つて、他のみんなとも一緒になつて勉強した時だった。その次は冬、にスケートでスピンを披露しようとして、スケートよりも先にスピンができるようになる技を学ぼうと決意し

た時。

一方、マヤちゃんの家にはこの中の誰も行ったことがなかった。だから、一番手がかりがありそうなチノちゃんを第一、その次に手がかりを発見できそうなメグちゃん、最後にマヤちゃんという順番にした方がいいかなと思っただけ、ココアお姉さん（仮）からの答えはそれとは正反対の順番だった。

『そうだねー、実は三人の中だとマヤちゃん、メグちゃん、チノちゃんの順番に探したほうが確実だって計算が出てる』

「それってどんな計算なの？」

シャロちゃんの質問に、ココアお姉さん（仮）は待つてましたとばかりに説明を始めた。

『まず、マヤちゃんってとても頭が良いと思うんだ。今まで見てきた世界のマヤちゃんはどこでもそうだったから、そっちのマヤちゃんもそうじゃないかな

と思うんだけど』

「確かにそうだったな。マヤがうちの学校の特待生試験を受けるって言った時に、はじめはマヤが冗談言ってるって思ってた。その時にチノとメグから実はあいつ頭が良いって言われた覚えがある」

「確かその時は私もリゼ先輩と一緒にした。私は自分で言うのもなんですけど、とても頑張ってたのか特待生になったので、マヤちゃんが中学校の先生から特待生試験を勧められるくらいすごいんだって知って驚いたくらいでしたし」

「好奇心旺盛おうせいなのがとてもいい方向に働いてるとかなんとかだったな」

私もその話は後から理科の家庭教師をする時に聞かされた。普段のマヤちゃんも元気いっぱい、どちらかと言うと勉強できますオーラは特に出ていなかったから、話を聞いてびっくりして、そしてマヤちゃんのことを全然知らない

かったなと、みんなのお姉ちゃんとして深く反省した思い出がある。

『マヤちゃんの頭の良さだったら、いろいろと思ひ出してもらうためのことやったら、持ち前の好奇心と思考力ですぐに答えにたどり着いて、全部思ひ出してくれるのにかかる時間が短そうだと思うたのがひとつあるんだ』

「なるほど……」

『それと、マヤちゃんってメグちゃんのこと大好きでしょ？ 頭の良さとその思い入れ、粘り強さがあれば、メグちゃんをすぐに探し出せそうだと思うた。もちろん私もいっぱいサポートするよ？』

「確かにマメは一心同体なコンビみたいなんだしなあ」

『ライクな「好き」かもだし、他の世界だとラブな「好き」な関係性もあつたから、そつちでも仲が悪かつたとか喧嘩けんかしたとかいうことがなければ、その絆きずなで見つけられそうだって思った』

ココアお姉さん（仮）の話を書く限りでは、マヤちゃんとメグちゃんはうまく見つかうそうだった。一方で……。

「やっぱりチノちゃんを探すのって時間がかかるの？」

この質問に対する並行世界の私からの答えには少し戸惑いがあった。

『本当は私とチノちゃんの絆の深さで五秒で探し出せるはずだって思ってたんだけど、実は、チノちゃんだけはこっちで全然感知できてないんだ。一度も……』

場が沈黙した。

『ここまで、マヤちゃんやメグちゃんは、ほんの一瞬だけどその反応が今まででもあったから、それをもとに絞り込みを進めてきたんだけど、チノちゃんだけは全く無いの』

「そうなの……」

『うん。だからできるだけ早く見つけられるように、チノちゃんとながりがある人の数を増やすために、マヤちゃんとメグちゃんをいち早く探すことにしたいんだけど、どうかな？』

チノちゃん捜索の手がかりがほとんど無いのは痛かった。だから、少しでも早く見つけられるための作戦を実行したい。ココアお姉さん（仮）への答えは一つだった。

「わかった。みんなを一番早く見つけられるようにしたいから、まずマヤちゃんを優先して探したい」

私の決意に、みんなも同意してくれた。

「同じく」

「やりましょう」

「ええ。すぐにやらないとね」

この方針で、明日から早速行動すると決定した。

話がまとまったところで、シャロちゃんが手を挙げた。

「ところで、私の家ってちゃんと千夜の家横にあるのよね？」

「シャロちゃんがいる世界と魔術？　でくつつける前は空き家としてきちんとあつたし、この世界にもあると思うわ」

『その点は大丈夫。きちんとシャロちゃんちの影が見えたから』

千夜ちゃんとココアお姉さん（仮）の言葉に、シャロちゃんはほつと胸をなで下ろした。

「良かったわ。家が元通りなのか、何かおかしいことになってないかとても気になるけど……。というか、明日は平日よね？　学校があるはずだけど、私の学校はあのいつもの高校なのよね？」

『シャロちゃんに関しては全部元に戻っているから大丈夫かな』

生活上の問題も心配なさそうだった。でももし何かあつたら一緒にいろいろやろうと思つたので、うちに誘つてみた。

「もしダメだつたらシャロちゃんもラビットハウスで合宿しよう！」

「甘兎庵あまうさあんでもいいわよ」

私の誘いに千夜ちゃんも対抗するように誘い、ここは千夜ちゃんの方に軍配ぐんばいが上がつた。

「ま、千夜んちの方が慣れてるし、何かあつたらそつちにお世話になるわ」

「喜んで♪」

会議はこれでお開き。千夜ちゃんとシャロちゃんは甘兎庵に帰り、ラビットハウス組の私とリゼちゃんはお風呂に入つてとても長い一日の疲れを癒いやした。

「あーつかれたー！ 身体にお湯が染み渡る」

あまりにも気持ち良くて、このまま全部溶けてしまいたいそうだった。リゼちゃんもそばで身体を洗いながら頷うなずいていた。

「非常に疲れたが、やっと高校生組が揃ったな。正確には私は大学生だが」

「リゼちゃんも高校四年生になっちゃう？」

その言葉に一瞬きよんとしたりゼちゃんが、笑いながら首を振った。

「一瞬それもいいかと思っただが、高校の制服を着ようと考えただけでなぜかへんないかがわしさを感じるようになってしまったから、ちよつと無理だな」

「制服を着るところが問題なんだ……」

まさかのそこ？ という引つ掛かりポイントがあつたため、リゼちゃん高校生カムバックキャンペーンはなしになった。

夜が明けて月曜日はお互い学校がある。私は高校へ、リゼちゃんは大学へ出かけた。

「一応大学生活の記憶があるし、教科書もノートもあるんだが、本当に合っているのか不安になるな」

「じゃあ一緒に大学に行く？」

「いやココアは高校があるだろ。私も大学生なんだからなんとかしてみせるさ。いざとなったらユラに……いや、あいつはいるかいなにか分からないな」

リゼちゃんは首を振って歩き去ったものの、語尾が震えていて、動きがギクシャクしていた。いつものリゼちゃんなら何も気負うことなくスタスタ歩いていくところだと思っただけだ。元の世界のことを思い出したばかりのあの時にリゼちゃんが言った、みんなと離れ離れになったまま、それさえも忘れてしまつてひとりぼっちで生きるのが怖い、という不安の現れなのかもしれない

かった。

リゼちゃんのことを気にしつつ高校に向かってしていると、途中で千夜ちゃんと合流した。

「おはよう千夜ちゃん！」

「ココアちゃんおはよう」

「シャロちゃんは？」

「『今の私にとってには初登校だし、何かあつたらいけないから』って、早めに学校に行ったわ。せめて朝ご飯を食べていけばよかったのに」

千夜ちゃんが少し残念そうな声でつぶやいた。

「そういえばシャロちゃんはおうちに無事帰れたの？」

その言葉に、千夜ちゃんは目を伏せた。

「それがねココアちゃん、鍵がなかったの」

「鍵がない？」

「ええ。大きいシャロちゃんが小さいシャロちゃんになったでしょう？ あの時に大きいシャロちゃんの持ち物も一緒にやってきたみたいなのだけれど、なぜかあのおうちの鍵が無くて。甘兎庵にはあるかもって探したけど、昨日は見つけきれなかったわ」

「大変だねー……あれ？ じゃあシャロちゃん制服とか下着とかはどうしたの？」

私の疑問に、千夜ちゃんはあつさり答えた。

「それならうちに予備があるわ。ちゃんと」

笑顔でピースサインをくれたけど、下着はともかく、予備の制服がなぜ千夜ちゃんちにあるか不思議でたまらなかった。でも訊きいていいのかどうか分からなかった。うん、訊かなくてもいいことって、世の中にはあ

ると思うんだ。

喋っているとおつという間に高校に着き、その瞬間、委員長の急襲きゅうしゅうを受けた。

「てえへんだココアーツ！」

「なんでえいいんちよー、騒々しい♪」

私が目を白黒させているうちに、千夜ちゃんのほうがお決まりのフレーズで返事をした。勢いの代わりにとてもほんわかとした口調だったけど。

「千夜も一緒に！ 来て！」

二人揃って引きずられるように連行され、着いた先はおなじみの私達の教室だった。

うさぎがいた。しかもいつぱい。

「うさぎだ！」

ついふらふらと身体が動いて、委員長に襟えりを掴つかまれた。

「ぐええ……」

「待ちなさい！ なんだか動きが変なの！ 無防備に乗り込んだらココアも帰らぬ人になっちゃう！」

委員長が指差す先にいたのは、安らかな表情を浮かべてうさぎに埋もれて眠るクラスメイト達だった。その数十二名、実に三分の一が犠牲ぎせい（？）になっていた。

「何事なのかしら？」

「これはねー、たぶんみんな何かに引き寄せられて群がっちゃったのかな？」
「風水的にうさぎを呼び込みやすい環境になっていたところに、最後のピースが何かはまってこうなったのかも……」

千夜ちゃんの疑問に、ミキちゃんとあんずちゃんが答えた。まわりにいる他のクラスメイトも興味津々きょうみしんしんなのは明らかで、この事態に恐怖を感じている様子は全く無く、お祭りみたいに楽しんでる子ばかりだった。

「この状況でも笑っていられるのって、つくづく、うちのクラスって変わってるねー」

「いや人のこと言えないでしょココア」

委員長から秒でツツコミを入れられた。

うさぎのもふもふに巻き込まれて帰れなくなりそうだけど、このままでは授業を受けることができないので、無事なクラスメイト達と手分けしてうさぎを

外に誘導し、十数分ほどで部屋を解放することができた。安らかに眠っていたクラスメイト達も起こした。

「やつと終わったー。でも公園じゃないところにこんなうさぎが集まるなんて珍しいね……」

「そうね、うさぎさんが集まるものがあつたりしたのかしら？」

私と千夜ちゃんがウンウン唸うなっていると、委員長の声が聞こえた。

「誰か鍵とヘアピンなくした人いないー？」

みんな自分の持ち物を確認したけど心当たりの人はいなくて、では誰のだろうと確かめに行つてその物を見たら、千夜ちゃんが息を呑んだ。

「このキーホルダー……たぶんこの鍵はシャロちゃんちのだわ」

「えっ！」

なんでここにあるんだろう。驚いていたところにレイちゃんとカノちゃんも

来た。

「どした〜？ 心当たりあった？」

「これ、シャロちゃんの家の子だわ」

「シャロちゃん……あ！ 去年の文化祭に来てたお嬢様高校のお嬢様オーラマシマシの子だよね!？」

レイちゃんはかなり前のめりになって聞いてきた。

「え、ええ……そうよ」

「今度お嬢様オーラの出し方教えて下さいって伝えて！ お願い！」

思わぬ依頼に面食らっていた千夜ちゃんだったが、すぐに笑顔になった。

「わかったわ。シャロちゃんきつと喜ぶと思う♪」

出会ったばかりの頃はシャロちゃんのお嬢様オーラをビシバシ感じるが多かったけど、今はほとんど感じることはない。長年の付き合いでシャロちゃ

んの本当の姿が分かるようになったからかもしれない。

「鍵は持ち主が分かりそうだけど、こつちのヘアピンはどう？」

「これは……」

どこかで見たような覚えがあるような、ないような。

クラスメイトにもう一度尋ねたものの、心当たりのある人はやはりいなかった。シャロちゃんの鍵と一緒に見つかったから、もしかしたらチノちゃん、マヤちゃん、メグちゃん搜索の手がかりになるかもしれない。そう思って、私が預かってラビットハウスに持ち帰ることにした。リゼちゃんはマヤちゃんと同じ行動することが時々あったから、何か知っているかもしれない。

朝から謎のハプニングがあったものの、この後はとても平穏で、授業もいつもと特に変わりなく進んだ。

放課後、千夜ちゃんと街を散歩しつつラビットハウスに向かった。手がかり探しと称しつつも、本当のところは七割方ウインドウショッピングになつてい
る街歩きだった。通りかかった公園には今日もうさぎがたくさんいた。

「あそこのうさぎさん達がうちの教室まで押し掛けてたのかな？」

「そうねえ。もしかしたらそうかも」

もしそうなら、シャロちゃんちの鍵や一緒に現れた謎のヘアピンは、公園のあたりから私達の高校までうさぎ達が大移動する時に巻き込んで持ってきたものかもしれない。

公園のところで、脇の道から出てきたリゼちゃんと出会った。

「おーいココアに千夜ー、今帰りか？」

「リゼちゃんおかえりー！」

「おかえりなさい」

リゼちゃんは大学で四時間分の講義を受けて、終わってすぐに帰ってきたらしい。

「講義と講義の間に大学での友達に話しかけられて、最初はとてもドキドキしたんだが、話してみるときちんと昔から覚えていたように話ができたから助かった」

「リゼちゃんの大学でのお友達ってどんな感じの人？」

「そこがまだ分からないんだ。細かく詳しい話をする間柄にはまだなっていない感じだった。でもあの子妙なこと言ってたな。『今日はユラちゃんいないんだね。お休みなの？』って。ひよつとしてユラがいつも一緒にいるのか……」

みんなを探し始めた時、リゼちゃんと最初に合流した時のことを思い出す。

あのような感じで裏からストー、コホン、見守っているなら多分そのあたりに――。

「呼んだー？」

「うわっ！」

「きゃっ！」

「あら？」

誰もいなかったはずの場所にいきなりユラちゃんが現れた。

「ユラ、どこから現れたんだ？」

「あそこに植え込みがあるでしょ？ 陰から瞬間移動したー」

ユラちゃんが微笑みながら百メートルは離れている植え込みを指差した。あそこ誰かいたつけ？ さつきちらりと見た時もこちらに近づいてくる姿は何もなかったはずなんだけど……。

「ユラの身体能力なら瞬間移動できそうだが、心臓に悪いからいざという時以外は控えてくれ」

「善処ぜんしよするー」

これはきつと次からもつと神出鬼没しんしゆつぎぼつぶりを磨く、という意味の返事のように聞こえた。ユラちゃんと目が合った。ウインクされた。これはもう確定だね……。

「ユラは今日はどうした？ 大学には来てたのか？」

「いたよー？ なんかりゼがふるふる震えてて面白そうだったから、声掛けずにずっと遠くから見えた」

「そこは声を掛けてくれ……」

「なかなか家に帰ってこなくて寂しい思いをさせている罰」

週イチじゃなくて週に二、三日は帰ってきてね、リゼ。——そう言つてユラちゃんは去つていった。

「単身赴任たんしんふにんでなかなか帰つてこないのを寂しがっている光景みたいね」

千夜ちゃんがニコニコ笑顔でツツコミを入れ、想像して思わず笑ってしまった。

ラビットハウスに帰り、部屋でリゼちゃんに例のヘアピンを見せたところ、目を見開いて驚いていた。

「これ……マヤにプレゼントしたやつと同じだ」

「ほんとっ!？」

「ああ。卒業アルバム撮影前にイメチェンしたくて、せめてアホ毛をいい感じに抑えたかったらしい。それで一緒に見て私も色違いのを買ったんだ。確かバッグに入れてきてたはず」

リゼちゃんがお泊まり道具入りのバッグの中を探し、出してきたくれたヘアピンは、私が預かってきたものと全く同じ形の色違いだった。

「もしかしたら同じ形のものにはいっぱいあるかもしれないが、シャロンの鍵と一緒に見つかったなら、これはマヤを見つける手がかりにできるかもしれない」

せっかくならココアお姉さん（仮）にもこの話を早速伝えて、どのような方針が取れそうか話をしてみようと思っただけ、連絡がつかなかった。

「いつもならこの時間でも普通に応答してくれてたと思うんだけど……残業かな？」

「かもな……」

ひとまずヘアピンは私の部屋のわかりやすいところに飾って、なくさないようにした。

夜、だいぶ遅めの時間になってココアお姉さん（仮）から連絡が来た。

『ごめんねー、今日はトラブルが発生しててねー、今帰ってきたところだったんだ。着信の記録があったから見たらもう五時間近く前だったね……』

「お、おつかれさまです隊長！」

「おつかれさまです！」

『ココア隊員、リゼ隊員ご苦労！ 何か手がかりか情報が見つかったのかな？』

「はい！ マヤちゃんのものである可能性が高いヘアピンが見つかりました！
サー！」

『正しい英語だと女性上官に対しては「ママ」らしいよー。それはさておき、お手柄だねみんな！ どうやって見つけたの？』

「うさぎさんの大群が運んできてくれたみたい！」

『……はい？』

困惑するココアお姉さん（仮）に今朝の話を伝えた。

『ふうん。なるほどねえ。その教室に鍵やヘアピンがあつたからうさぎさんが集まつたのか、それともそこにあつた別の何かに引き寄せられて大集合したのか気になるけど……これは重要なヒントだね、うん』

ちよつと調べるから今日はこのへんで！ との言葉を残して通話は途切れた。

「ココアはどの世界でも元気があるな。毎回言っている気がするが」

「向こうの私、過労死しちゃうんじゃないのかな？」

「まあ、向こうのチノがグーパンチで強制的に眠らせそうだから問題ないかもしれないな」

以前連絡を取り合っていた時に『ぐーはやめて！』と聞こえてきた思い出が蘇よみがえった。もし向こうの私に会えたなら、何か疲労回復に効くものをプレゼント

トしようと思った。

ちなみに見つかった鍵は確かにシャロちゃんの家のもので合ってたと連絡が来た。鍵が開いた瞬間、シャロちゃんは泣いて喜んだとのことだった。

数日後、金曜日の夕方にココアお姉さん（仮）から速報が入った。千夜ちゃんとシャロちゃんもただちに集めるよう指示を受けたのですぐに連絡を入れたら、二人とも高校の制服姿のまま駆けつけた。

『諸君！ 早速だけど、たつた今からマヤちゃんのいる世界を接続するよ！』

「もう見つけたの!? というかいつも夜にやってたアレを今からやるの？」

「ずいぶん急な話だな姉ココア」

「うん！ リゼちゃんがお姉ちゃんって呼んでくれたお礼にいつぱい説明しちゃうよ！」

「……余計なことをしてしまったか」

それから小一時間、お姉さんの講義タイムになった。いわく、マヤちゃんの世界は今この世界とかなり近いところに重ね合わせのようになって存在していて、今までよりも最も少ない力での接続が実現でき、そこにいるマヤちゃんも元の世界と同じ木組みの街在住、年齢も元の世界と少ししか変わらないくらいだと分かったらしい。

『というわけでそっちの私！ お腹を一発ドカンとやられちゃって！』

「やだよ!？」

私がお腹をやられる、これは百パーセントあの呪いのステッキを使えということに違いなかった。

「さらつと恐ろしい単語が聞こえたが、あのとんでもないアレが必要なのか……?？」

リゼちゃんが代わりに聞いてくれた。つい何日か前に冗談で話したことが本当になりそうというか、あと何回も痛い思いをしないといけないというのはどう考えても恐怖でしかなかった。

十分後。

『準備はいい？』

「万、ぜ、んんーっ！」

お腹のまわりを今度こそ隙間なく固めた。お姉さんの解説いわく、私のお腹が撃ち抜かれる必要はない、というかあれはなぜか毎度起きている不慮ふりよの事故だということで、何が何でも回避しようと対策した。

「重い……」

「やっぱり甘兎庵秘蔵の甲冑かっちゆうは重すぎたかしら？」

「さつき持ったたらかなり重かったんだが、千夜はどうやって運んできたんだ？」

「あら？ 特に重くないと思うのだけれど」

「和菓子作りで鍛えられていられるのかもしれない……」

「あの……この兜かぶともいるの……？」

部屋の真ん中にかろうじて立ち、もはや妖刀ようとうと化したマジックステッキを構えた。

「声が出せないくらい辛いんだけど……あの呪文は無しで大丈夫……？」

『うん、いいよ。雰囲気は出ないけど今回はそんなにパワーはいらないから多分大丈夫。こちらから合図を出すから、タイミングを合わせて念を込めてステッキを振ってね』

「分かった」

深呼吸を一回、二回……三回。よし。

「いいよ」

『じゃあ行くよ。スリー、ツー、ワン』

『Go!』

ココアお姉さん（仮）の掛け声とともにステッキを振った。その瞬間、今まで経験してきたのと同じような、目に見えない圧を感じた。……うまく行った？

『……、うん。接続成功』

「良かった……今回は助かった……」

ステッキを一旦足元に置いた後、甲冑を脱いでから一息ついて、ステッキを

再び拾った時、油断したことを後悔した。視界の中をスローモーションで伸び始めたステッキ、慌てて捨てようとするも間に合わず――

「がはっつっ！」

「「ココア!?!」」

「ココアちゃん!?!」

妖刀・マジックステッキに対して四敗目を喫ってしまった。

『そちらの世界の私が身を挺して活躍してくれたから、世界はまた一步統合に近づいたよ。私の活躍に乾杯!』

「かんぱい!」

「かん、ぱ、い……」

ジュースでささやかなお祝いをした。

『この街にいるマヤちゃんだけど、家の場所についてはまだ掴めていないんだ。でも、行動範囲には間違はなくラビットハウスの周辺も入っているから、そう遠くないうちに合流できるはずだよ』

「まあ、今までが街をまたいだ大搜索だったから、今回は距離が短くて土地勘がある分とても助かる」

「そうだね」

リゼちゃんの言う通りだった。リゼちゃんの時はこの木組みの街の中だったけど、千夜ちゃんとシャロちゃんを探す時は右も左も全くわからない街を彷徨っていたから、それに比べたらとても行動しやすかった。少なくとも、ご飯や夜の寝床の確保に苦労することはないから。

『それじゃ、明日からも頑張ろー、おー』

「おーー」

「お、おー……っ？」

少し気が抜けたココアお姉さん（仮）の掛け声に、私と千夜ちゃんが元気よく返したけど、リゼちゃんとシャロちゃんは少し困惑気味だった。

一階に降りてお店の方を覗くと、ホールがだいぶ賑わっていた。タカヒロさんとサキさんが少し忙しそうにしている。今夜はお仕事のスケジュールは入っていないけど、手伝った方がいいのかな。

そう思っていた時に扉が開いて、また一人お客さんが来た。少し小さめの身長、好奇心の塊のような表情の子。

「……マヤちゃん？」

一步、二歩、三歩、さらに歩み寄って、彼女の前に立って、じつくり見た。

「どうしたの、お姉さん？」

その声、表情、そして『お姉さん』の言葉。

「はい！ お姉ちゃんです！」

思わず抱き着いた。

「おいココアいきなり抱き着くんじやない！」

頬ほおずりもするんじやない！」

「ほほえま〜♪」

「あれじゃただの不審者よ……」

みんなの声に呆れ成分が混じっているのが分かったけど、こればかりは止められなかった。マヤちゃんもくすぐったそうにしていた。このまま一気にいろいろ思い出すことにつながればと思っただけど、さすがにそこまでうまくはいかなかった。

「あはは、はじめましてのお姉さん、変わってるね♪」

予想はしていた言葉、何度となくみんなの口から聞いた言葉と同じ意味の言葉。少しくりくりとする言葉だけど、でも大丈夫。

「そうかも」

だから、『はじめまして』の挨拶をした。

「私はココアって言います！ あなたは？」

「マヤ！ よろしく！」

「よろしくね！」

☆

☆

☆

タカヒロさんに一言伝えて、ホールの隅の方にある広めの席にみんなで座った。マヤちゃんは一人でラビットハウスに来たらしい。学年は中学三年、今の私達との比較だと本来よりも学年ひとつ分若いことになる。

「学校が終わって一回家に帰ったんだけど、なんか暇だったし、ちよつと街を散歩してみようかなって思つて。それでここ……ラビットハウス？ を見つけてちよつと入つてみたら不審者お姉さんのココアにとつ捕まったわけ」

「不審者……」

マヤちゃんにケラケラ笑われながら『不審者』と一刀両断されて、とてもへこんだ。へこんだ勢いでテーブルに突つ伏した。

「いきなり距離を詰めて抱き締めて、しかも頬ずりまでするなんて、国が違つたらそのままショットされるぞ」

「そうだよね……拳銃で背中とか脇腹とかぐりぐりされちゃうね……」

「うっ……その節は悪かったよ……」

ふと思いついたことが口からそのままこぼれ、それにリゼちゃんが反応してテーブルに突っ伏してしまった。

「何かめんどくさい雰囲気になってるんだけど、どうしたらいいのかしら。今夜、何かアイデアある？」

「そうね……こういう時はコーヒーね」

「やつぱり」

「シャロちゃんが飲むと一番効き目があるわ♡」

「なんで私なのよ！」

テーブルにおでこをくつつけたまま幼馴染ーズの漫才を聞いていると、そこにマヤちゃんの笑い声が入り込んできた。

「あははっ、ココアだけじゃなくて他のお姉さんたちも面白いね！ ひよつと

して漫才のグループ？」

「いや、そういうつもりは全く無いんだが」

「でも、漫才グループを結成するのも面白そうだわ」

「千夜はハリセンを振り回したいだけでしょ」

その言葉を聞いて閃ひらめいた。

「決めたっ！ たった今漫才グループを作りました！ リゼちゃん千夜ちゃんシャロちゃんマヤちゃん、それに私で漫才やろう！」

私の宣言に高校生組があっけにとられる中、マヤちゃんだけは笑いながら参加を決めてくれた。

「改めまして、保登心愛です！ 『お姉ちゃん』って呼ばれるのが好きです！」「自己紹介がそれなのか……。天々座理世だ。リゼと呼ばれることが多い。よ

ろしく」

「宇治松千夜です。和菓子作りのお仕事をしつつハリセンツツコミの腕を磨いているわ」

「桐間紗路よ。ハリセンツツコミの腕を磨いている千夜にツツコミを入れるのが仕事。よろしくね」

簡単な自己紹介をマヤちゃんは目をキラキラさせながら聞いてくれて、そしてまた大笑いした。

「やつぱりお姉さんたちすごいや！ 面白いお姉さんって意外なところにちゃんというもんなんだねー」

マヤちゃんがうんうんと頷いて改めて自己紹介してくれた。

「条河麻耶です！ 友達からはマヤって呼ばれてるんだ。趣味は街の面白いこと探して、特技はCCC！」

「渋い趣味ね〜」

「面白いことを探すのは渋い趣味なのかしら？　むしろ対極のアグレッシブな気がしなくもないんだけど。あとCQCって何？」

シャロちゃんの疑問にはリゼちゃんが答えた。

「CQCは近接戦闘という意味だ。いろいろな技がある。……やはりマヤは軍に関わる家系なのか……？」

昔、元の世界でマヤちゃんがメグちゃんと一緒に初めてラビットハウスに来たときのことを思い出した。あの時は最初にリゼちゃんの制服を貸したら、着替えのために開けたロッカーの中からモデルガンとコンバットナイフを見つけ、持ってきたんだっただけ。その時の話の流れでCQCの言葉が出てきたような、出てこなかったような。

「え？　別にうちには軍人さんはいないよ？　先週テレビでやってたからアニ

キ相手に技を掛けてみてただけ。全然掛かんなかったけど！へへっ

「……素人が変に技を扱おうとケガをするぞ。次からはやめとけ」

「わかった！」

マヤちゃんはリゼちゃんの半ば呆れたような感じの注意をあつさり受け入れた。

「せっかくラビットハウスに来てくれたんだし、コーヒーでもどうかな？」

私が勧めてみたら、マヤちゃんは残念そうに首を振った。

「いいね！ って言いたかったんだけどさ、お小遣い日三日前だから三百円しか持つてないんだよね……。お小遣いもらつても千円しか増えないけど」

「ちゃんと計画的にお金を使っているなんて偉いわ……。私なんかつい美しいカップに心奪われてアルバイト代を使い果たしちゃうのに」

シャロちゃんが感動の涙を流し、さらにリゼちゃんが大盤振る舞いの宣言をした。

「よし。私が奢^{おご}ろう。せつかくラビットハウスに来たのに、コーヒーやいろいろなメニューを楽しまないのは大変もつたない。お近づきのしるし、というやつだ」

「いいの!？」

リゼちゃんをはじめ、私も、千夜ちゃんも、シャロちゃんも深く頷いた。お姉ちゃんたちからのプレゼント！

「遠慮はいらないぞ。私は大学生だから財布には余裕が——すまん、今日のところは千円まで頼む」

リゼちゃんがお財布の中を覗き込み、それから顔を赤くして手で覆ってしまった。みんなで出し合えば問題はなかったけど、マヤちゃんから「千円分も

奢ってくれるなんてすごいよ！ だって私のお小遣い一か月分だよ？」と辞退されたので、リゼちゃんが出す分だけで収まった。

「そうだねー、ご飯は家にあるから、コーヒー……オリジナルブレンドとこのアイスで！」

タカヒロさんのところへ注文を伝えに行き、そのついでに受け取って戻ってきた。

「どうぞ！ うちのオリジナルブレンドだよ！ そしてマスターのタカヒロさん特製バナラアイス！」

「美味しそう……！ 食べていい？」

「どうぞめしがれ♪」

「いただきまーす！」

マヤちゃんがその元気な返事とは裏腹に、とても落ち着いた感じで上品に

コーヒーカップを口に運んだ。

「おいしい……。私が知ってる単語や表現じゃ正しく伝えきれないんだけど、でも、毎朝このコーヒーがすぐそばにあればいいなって思った！」

その感想に心がじん、と来た。変に飾った言葉を探して持つてくるよりも、一番真っ直ぐな言葉だった。

「……マヤちゃんの文才に惚れたわ。ぜひとも甘兔庵に来てくれないかしら。新しい商品の名前とキャッチフレーズを共に考えましょう」

「千夜、どさくさに紛れて勧誘するな」

その後、マヤちゃんはバナアイスも美味しそうに平らげた。ちょうど私がカウンターの方を向いた時にタカヒロさんと目が合ったのでサムズアップしたら、サムズアップとウインクが返ってきた。

「じゃあねお姉さんたち！ また遊ぼう！」

「ばいばい！」

手をぶんぶん振りながら離れていくマヤちゃんが見えなくなるまで、こちらからも手を振り返した。

中に戻り、引き続きホールの片隅を借りて作戦会議の続きを開いた。閉店時間近づいてきて、お客さんの数もだいぶ少なくなっている。

「さて、世界を接続した瞬間マヤがラビットハウスに転がり込んできたわけだが」

リゼちゃんの言葉に、シャロちゃんが期待を隠しきれない声で返した。

「もしかして、今までで一番速く記憶を取り戻してくれる展開になりませんか？」

「そうだと嬉しいが……」

みんなを捜して、徐々に見つかって仲間が増えてきて、ついに高校生組が四人揃った。あと、毎回相談でお世話になっているココアお姉さん（仮）と青山さんで六人。ここまで来ると、マヤちゃんに記憶を取り戻してもらうために、今までみんなで作ってきたことを再現する取り組みも速く進められそうだと
思った。

速く進められたからと言って、成果が速く得られるわけではないと悟るまでに、そう時間は掛からなかった。

☆ ☆ ☆

「こんにちはー！」

マヤちゃんとの再会から二週間経った土曜日の午後、ラビットハウスにマヤちゃんの声が響いた。

「おつ、今日も来たか」

「またバイトしてもいい？」

「大歓迎！」

私が両手を上げて歓迎の意を示すと、リゼちゃんからメニューで頭をはたかれた。

「またそのへんで寝る気だろ。中学生を働かせてサボるんじゃない」

「先週お昼寝しちゃったのは不可抗力だふかこーりよくつて！ ふかこーりよく！」

「あははっ！ ココアとりゼのノリツツコミは今日も最高！ お仕事は全部任

せて！」

「ううん。自分で頑張ります……」

先週お昼寝してしまつてリゼちゃんとマヤちゃんがお仕事をした時は、私のお給料は減らなかつたけど、代わりに三日間おやつ抜きがサキさんから宣告された。とてもつらかつた……。

マヤちゃんから『アルバイト』をしたいとお願いがあつた時、サキさんは『お手伝い』の範囲であることを条件に許してくれた。マヤちゃんの制服は私達のものとは色が違いが用意された。その色はスカイブルー。元の世界でマヤちゃんが袖を通したのと同じ色のものだった。製作は元の世界と同じくりゼちゃんが担当した。

「さて、今日は何のレクチャーをするかな」

「護身術！」

「それはラビットハウスじゃないところでやるものだ。何かここでしかできないことで頼む」

「そだねー、じゃあラテアートがいい！」

「わかった。私とココアが教官になろう。ビシバシ行くぞ、いいか？」

「らじゃー！」

私がティップピーをイメージしたうさぎのラテアート、リゼちゃんがハートのラテアートを描いてみせた。リゼちゃんのラテアートはとても美しかったけど、私のは久し振りだったのでちよつと歪ゆがんじやつたかも。

「リゼうまい！ ココアのは……どんまい！」

「うう……」

結局ちよつと歪んだどころかそのまま流れてしまって、ティップピーじゃなくてただの丸い円になってしまったけど、途中は一瞬だけティップピーっぽくなっ

ていて、その場面はマヤちゃんも見てくれていたので良かった。もっと頑張ろう……。

「マヤは何を描いてみるか？」

「うーん……ひまわりでも描いてみよっかな」

「おお……」

まずは紙にイメージを描いてもらった。それをもとに、シンプルなイラストチックのひまわりを描くことに決め、リゼちゃんの個人指導が始まった。

「よし、これをこうしてだな。……これはいい感じなんじゃないか？」

「うーん、もうちょつと頑張ってみたいけど……ココア大丈夫？ コーヒー全部飲んでもらっちゃってるけど」

「気にしないでマヤちゃん……ウツプ」

お腹がたぷたぷしてきてちよつとまずい気がしたので、休憩ついでに一旦

バックヤードに引っ込んでトイレに行ってきた。少ししてリゼちゃんと交代。ちょうどお店のお客さんが途切れて、ホールは私とマヤちゃんの二人きりになった。

ここまで週に二、三回は会って、マヤちゃんが元の記憶を取り戻せるよう、今まで私達と一緒にしてきたことを目の前で再現していた。でも、今までと違って、思い出しているような感じが少しもなかった。何をしたらいいか手札が無くなってきてしまったので、ここはいつもお世話になっている青山さんに

「こんにちは」

頼ろうと思ったたら、ちょうどラビットハウスに来てくれた。

「青山さんいらっしやいませ！」

「こんにちはココアさん。……あら、新しい店員さんですか？」

「うん！ マヤつて言います！」

「よろしく願います」

青山さんからはオリジナルブレンドとパフェの注文をもらった。

「今日はたくさんお仕事を進めたので、頭に糖分を補給しなきゃと思ひまして

」

「青山さんはどんな仕事してるの？」

マヤちゃんが興味津々な感じで聞いてきた。

「文章を書く仕事をしております。小説を少しと、雑誌にお食事処のレポ

トなどを書いていきます」

「へーっ！ ペンネームは何？」

「はい。青山ブルーマウンテンと申します」

「青山ブルーマウンテン……あつ、家の本棚に本がある！」

「あら、ありがとうございます〜」

「今度読んでみます！」

マヤちゃんが青山さんに会ったら何か思い出してくれるんじゃないかと思っただけ、やはりそのような感じはなかった。

青山さんはパフェを食べた後、さらに執筆タイムに入った。ほわほわとした雰囲気はいつも通りながら、いつもと違って万年筆を通して絵ではなく文章が生み出されていた。私とマヤちゃんは邪魔をしないようにそつと離れ、休憩から戻ってきたりゼちゃんと一緒に、再び集まり始めたお客さんのオーダーを取ったり、注文の品を届けるお仕事に戻った。

夕方になり、マヤちゃんの『アルバイト』は終了。タカヒロさんからお礼と

称したお小遣い入りのポチ袋を受け取って帰っていった。

「ココアさん、リゼさんお疲れ様です」

「今日も一日ご奉仕しました！」

「後半戦も半分くらいお客さんとお喋りしてただろ」

「あはははは……」

「このみなさんはいつも楽しそうで、とても癒やされますね。おかげで、原稿がひとつ書き上がりました」

青山さんがしみじみとつぶやいた。

「青山さんおめでとう！ あと、お疲れのところすみません！ ちょっと相談

したいことが……結構話が長くなるんですけど」

「どうぞ、夜遅くまで語り合いましょう」

「さすがにそこまで遅くはならないと思うけども……」

自分の部屋から、しばらくしまい込んでいた「引っかかりノート」を持ってきて、リゼちゃんともども青山さんの向かいに座って、ノートも見つつ今までのできごとをいろいろと語った。これまでの世界の青山さんと同じように話をしつかり聞いてくれて、時々原稿用紙をメモ代わりにしてさらさらと何かを記していた。

「なるほど。大変興味深い話です」

「どうしたらいいのか？」

「そうですね、マヤさんに様々な手がかりを使って、元の世界のことを思い出さないか試しても効き目がないとすると……、ここはあれの出番でしょうか」

「あれ？」

「マヤさん個人に結びついていないエピソードではなく、マヤさんと、マヤさん

にとって最も大切な人と一緒になって体験しているエピソードを体験してもらう作戦です」

マヤちゃんだけでなく、マヤちゃんと大切な人が一緒になっているエピソード。その作戦は盲点だった。

「あー……、でも、今まで私達がやってきたことの大半は、マヤとメグがセツトで体験してきたことだったよな。何か他にまだ実行してないマメエピソードがあるか……?」

「うーん」

せつかく突破口が見つかったと思ったら、あつという間にまた行き詰まってしまった。

「とはいえ、私達が知らないマヤとメグだけのエピソードもたくさんあるだろうから、この際いろいろなところ、全く無関係なところも連れ回してみ

るか？」

「だいたい切った作戦だね」

とはいえ、木組みの街も隅から隅まで行き尽くしたような感じがあり、かといつてみんなで行った。百の橋と輝きの都。はちよつと遠すぎた。どこかちようど良さそうな場所は……。

「案外、隣町のような近所にこそ、お二人だけのエピソードがあるかもしれないね」

「それに賭けるか」

「……うん。やろう」

新たな作戦が決まった。最高のアイデアをくれた青山さんに深くお辞儀をした。

「ありがとうございます！」

「いえいえ」

週明けに作戦を開始し、手始めにマヤちゃんに会った時に近所にお出かけしてみようと誘ってみた。

「いいね、どこ行くの？ 公園？ それともお店？」

「ちよつと足を伸ばして隣町に行ってみようかなって思うんだけどどうかな？ 木組みの街の中はよく行ってるし、時々遠くにもおでかけしてるけど、すぐ隣の町ってなかなか行かないなあって思ったんだ」

「なんか面白そう！」

「マヤは隣町でどこかいとところ知ってるか？」

「うーん、なんか一箇所あったような……よく思い出せないんだけど……。ま、行つてからぐるぐる歩いてれば何とかなるでしょ！」

「豪快だな。まあ、思いついた順に歩いてみるのもいいか。ココアはそれでいいか？」

「大丈夫！　じゃあ今週末、土曜日朝九時集合でいい？」

「いいよ！」

無事に約束を取り付け、その日までにマヤちゃんの記憶復活につながりそうな材料を少しでも増やすために、街を歩いて色々探したり、前のことを思い出してメモに書き出したりした。そして、千夜ちゃんやシャロちゃんにも何か役立ちそうなものを探してもらった。

土曜日の朝。

「おいココアー起きろー」

何かが聞こえてきたのでひとまず二度寝の宣言をした。

「今日はおやすみー……むにやむにや」

「起きて、お姉ちゃん♡」

「ハッ！」

一瞬で覚醒かくせいしてガバリと身を起こしたら、誰かの頭と正面衝突して跳ね返された。

「痛い……」

「ててて、頭がぐわんぐわんする……」

おでこを押さえつつ声がした方を見ると、そこには同じくおでこを押さえちゃうずくまるマヤちゃんと、その横で呆あきれた顔をしているリゼちゃんがいた。

「ココアはやっぱり『お姉ちゃん』で起きるんだな」

「うう……あつ！ マヤちゃんがここにいてことはひよつとして寝坊しちゃった!」

「いや、別に寝坊じゃない。マヤがかなり早く来たから、もののついでにココアを起こしてもらおうかと思つて連れてきた」

「よかつたー……」

着替えてみんなでご飯を食べて、約束の十分前くらいにラビットハウスの外に出ると、ちょうど千夜ちゃんとシャロちゃんが並んで歩いてきた。

「お待たせー」

「もうみんな揃つたのね♪」

「じゃあ、隣町に向けてしゅっぱーつ！」

「しゅっぱーつ！」

木組みの街から隣町の中心部までは歩いて一時間ほどで、その手前には畑が広がっていたり、公園があったりした。春から夏への移り変わりで少しずつ暑

くなり始めていて、ずっと歩き通しだと倒れるかもしれないので、途中の公園にあつた木陰のベンチで休憩し、水分をしつかり補給した。

「こつちの水筒が水分補給用の麦茶で、こつちは私特製アイスコーヒー入りのボトルです！」

「いつの間にアイスコーヒーを作つてたんだ？」

「昨日の夜作つたんだ。ラビットハウスのお仕事が終わつた後に、サキさんに美味しい水出しコーヒーの作り方を教えてもらったの」

「へえ……」

「お昼ごはんかおやつを食べる時に飲もうね！」

「楽しみ〜！」

マヤちゃんが喜んだ一方で、シャロちゃんは哀愁漂う表情でつぶやいた。

「とても飲みたけれど、カフェイン入りだからあの異常なテンションになつ

「ちやうのよね……」

「シャロちゃんには水出し緑茶を用意したわ。うちの緑茶やお抹茶は普通に飲めているから、カフェインだけじゃなくて他の何かも影響していそうなのだけれど、それがまだ分からなくて」

「千夜……ありがと」

シャロちゃんがハイテンションになっちゃう詳しい原因がわかればコーヒーを飲めるようになるかもしれないので、ラビットハウスの店番をしつつ修行をしようと思った。

休憩してさらに歩くこと三十分、隣町の中心部に到着。木組みの街とまた少し違った街と建物の作りをしていて、どちらかというところと緑が多めな街だった。

「あつ！ あそこの川のところ！ 釣りができるんだって！ 行こう！」

マヤちゃんが叫ぶやいなや走り始めたので私達も急いで後を追いかけた。

そこは隣を流れる川から綺麗な水を引き込んで作られた釣り堀だった。表には「初心者でも大丈夫!」と書かれていたけど、釣り経験が豊富なのはリゼちゃんだけ、私とシャロちゃん、元の世界でのマヤちゃんはだいたい前にみんなで山奥キャンプに行った時が唯一の経験、千夜ちゃんは釣りをしたことがなかった。

「マヤはどのくらい釣りができるんだ?」

「うん? 全然。誰とも行ったことがなくてさ」

「ココアとシャロはキャンプの時以来か?」

「だね」

「あの時はわりと釣れたわよね」

「千夜は釣りの経験はあるか?」

「いいえ。普段は全くしないし、あのキャンプの時はメグちゃんとキノコ狩りだったから」

偶然出てきた『メグちゃん』の単語——今までも折に触れてマヤちゃんの前に出してきたそれにも、マヤちゃんは特段の反応を示すことがなかった。

「ふむ……じゃあ私がリーダーということで。一人最低一匹を目指すぞ！」

「イエッサー！」

一人一本釣り竿を持って釣りに挑む。生きものの餌はちよつとハードルが高かったので、人工の使いやすいものにした。

「あ、なんか引つ張られてる！ リゼこれどうしたらいい!？」

「落ち着け、この時は釣り竿の動きを見て合わせて……今だ！」

「えいつ！ あ、釣れた！ すごい！」

「私達もマヤちゃんに負けてられないね！」

「ええ」

マヤちゃんに対抗したけれどなぜかこちらは全然釣れず、その代わりに千夜ちゃんかビギナーズラックというものか、リゼちゃんのアドバイスを受けつつ釣れていた。

最終的には一人平均二匹釣れた。釣った魚は横にあるお店で焼いてもらって食べた。

「美味しい！　こういうワイルドな食べ方もいいね！」

「だろ？」

私の心からの叫びにリゼちゃんがうんうんと頷いた。

釣り堀を出てからはすぐそばの公園に移動してお昼ごはんにした。シートを敷いて、保冷バッグから手作りサンドイッチ（タカヒロさん製）の箱を取り出

して置いた。もちろんさつき麦茶とアイスコーヒーも忘れずに。

「「いただきます」」

やっぱりタカヒロさんの作るサンドイッチはプロの味がする。とても美味しい。パン屋さんの子としては負けていられない、乗り越えるべき最大の目標だった。

「これくらい美味しいサンドイッチを作れるようになりたいなー」

「うんっ。やっぱり修行が必要だね」

「いいなあ。私も作ってみたいなあ」

マヤちゃんのしみじみとした言葉に、千夜ちゃんが質問した。

「マヤちゃんは誰かとピクニックのご飯を作ったりしたことはあるの？」

「いやー、ないよ。お母さんが作ってるのを見るだけ。だいぶ前にアニキといつしよになって作ろうとしたら、ご飯性の違いでケンカしてチーム解散し

ちゃった」

「音楽の方向性の違いで解散みたいな言葉だな……」

やはりそこに幼馴染の存在は出てこなかった。

それから街に戻って、木組みの街にあまりないようなお店を中心に巡った。

千夜ちゃんが侘び寂びを感じる茶道具のお店の前から動かなくなったり、シャロちゃんがティーカップを買おうとしてお財布の中身と相談した結果断念したり、リゼちゃんがふわふわのぬいぐるみを見て作ろうと思いつたり、結構わいわいしていた。

マヤちゃんが、途中通りかかったおもちゃ屋さんで足を止めた。

「このミニチュアチェセット……」

「どうした？ あれが気になるのか？」

ふと思い出した。あれは確か一昨年くらいのクリスマスの際に、マヤちゃんがメグちゃんとお金を出し合つてチノちゃんに贈つたものにそっくりだった。もしかして。

「なんかちよつと引つ掛かるんだよね。私もアニキも他の家族も誰もチェスなんかしないんだけどさ」

「そうか。……私もチェスはしないが、何かちよつと心惹ひかれるものがあるな。買うか」

「すごい！ さすが大学生！」

「まあ、ラビットハウスからいいお給料をもらつてるからな」

そう言うとりゼちゃんはさつとそのチェスセットを買い、マヤちゃんに渡した。

「私が持っているところかどこかに忘れてそうで怖いから、しばらくマヤが持つてい

ていてくれないか？」

「荷物持ちかよー、ぶーぶー」

マヤちゃんは口では文句を言いつつも楽しそうだった。

いい時間になったので、木組みの街までまた歩いて帰ることにした。行きとは道を変え、ちよつと足が疲れ気味だったので、心持ち休憩を多めに取りつつ帰る。

途中、ひまわり畑を通りかかった。まわりよりだいぶ開花が速いみたいで、一面満開になっていた。公園のようになっていて、畑の中も散策できるらしい。

「すげー！ ひまわりがいっぱい！」

マヤちゃんが目を輝かせて今にも畑の中に飛び込んでいきそうになったので

慌てて止めた。

「いきなり畑に突っ込むな、そんな勢いで行ったら普通に全部なぎ倒してしま
うぞ」

「ちえつ。でも懐かしいよね。この畑の中をメグといっしょになって駆け回っ
たんだ。ひまわりがいっぱい生えたところを走り回ってたら二人して迷子に
なっちゃって、怖がるメグの手を引いて一直線に外に——メグ……?」

急にマヤちゃんの声に困惑が交^まじり、顔が強^{こわ}張^わって、こちらを見た。

「リゼ……ココア、千夜、シャロ……、今日のピクニックってこの五人だけ……?
メグは……?」

今にも泣きそうな顔になっているマヤちゃんに視線を合わせて、告げた。
「そこで話そっか。ちよつと長くなるけど」

そばのベンチにみんなで座って、今までのことを話した。マヤちゃんは持ち前の頭の回転の速さで、すぐに話を理解してくれた。

「メグはここに、……この世界にはいないんだね」

「うん。でも、見つけられる。私がみんなを見つげ出したように」

「できるの？」

「できるわ。確実に。私もココアちゃんに見つけてもらったもの」

「ええ。私なんか大人になっちゃったけど、なんか色々やってこうして元通りになったしね」

「信じて、いい？」

マヤちゃんのその言葉に、みんなで頷いた。

「私達の力と、並行世界の私の力と、マヤちゃんの力があれば、必ず」

「……わかった」

不安が交じる表情で、口を引き結んで頷き返してくれた。

夕焼け色に染まりつつある空の下、ゆっくり歩いて帰る道はさつきまでと違っずと静かで、元気印のマヤちゃんも言葉少なだった。

第八章 憧れのおひさま

(World Line Kigumi-B to Kigumi-A via Megu)

木組みの街に帰り着いた後、すぐにマヤちゃんと別れた。

「ラビットハウスに寄ってく？」

「……ううん。今日はちよつといいや。ごめんね」

手を振って去っていくマヤちゃんの顔はとても寂しげだった。

私達四人はラビットハウスに帰ったけど、みんな揃って険しい表情をしていたらしく、サキさんに心配された。

「お帰りなさい。あら、みんなどうしたの？ 何かあった？」

「あ、ううん。ちょっと疲れただけ。やっぱり暑い中何時間も歩くと大変だった！」

「そうなの……そんな時はちょっと体力を回復したほうがいいわね。レモネードでもどう？」

「「「お願いします」」」

サキさん特製レモネードの爽さわやかな甘さに救われつつ、次の方針の話し合いを始めた。

「確か姉ココアの話だと、次はメグを探したほうがいいって話だったよな」

「うん」

「マヤちゃんあれからずっと元気がなかったし、早めになんとかしたいわね」

「どうしたらいいかしら……」

「メグを探し出すためには、マヤと姉ココアの力にかなり頼ることになりそうだな」

私が見た感じだと、マヤちゃんはただ元気がないのではなく、自分にできることを頭の中で必死に探しているみたいだった。もともと好奇心のかたまりで、何かあつたらまず動く性格だし、むしろメグちゃんを探そうとして暴走しないかが心配だった。今まで以上に注意を払わないといけない。

千夜ちゃんとシャロちゃんが帰った後、ご飯やお風呂を済ませた夜遅くに、ココアお姉さん（仮）と会議をした。

『そっかー……、ちよつとマヤちゃんが心配だね』

「うん。何だか、すぐにどこにでも飛び出して行っちゃいそう」

『元の世界だとマメちゃんズと同じ高校に通ってるナツメちゃんとエルちゃんも、マヤちゃんと一緒にこの世界に合流してるんだけど木組みの街にいないし、そもそもまだ年齢を元の通りに揃え直してないからマヤちゃんが中学生のままだし……』

「そのあたりをすぐに揃え直したりとかできないの？ たとえば私がつと『まじゅつ』に力を込めるとかしたらできたりとかは……」

私の申し出に返ってきたのは不可能という返事だった。やり取りの窓口のティツピーも首を振るような感じで左右に身体を振った。

『シャロちゃんの時に使ったあの技なんだけど、科学的解析が全然進んでなくて、まだ本当に「まじゅつ」としか言えないような理解しかできてないんだ』

「天才の姉ココアにも分からないものか」

『うん。今だから告白すると、あの技を使った時に並行世界の構成がだいぶ入れ替わっちゃって、所在を掴つかんでいたマヤちゃんのいる世界を一旦見失っちゃってたんだ。それを明かすとみんなが混乱しそうだったから隠してたの。

……ごめんね』

思わぬ危機があつたことが知らされたけど、それから比較的すぐに見つけ直すことができたから問題はなかった。

「でも無事見つけたから大丈夫」

『ありがと。マヤちゃんの時は今の世界とほぼ重ね合わせだったから割とすぐに見つけられて、世界を接続するための術もすぐに組み立て直すことができた。でも次はその保証がないんだ。今だいぶ絞れつつあるメグちゃんのいる世界とそこでの居場所を見失うと、また見つけるのにどのくらい時間がかかるかわからない。リゼちゃん、千夜ちゃんの時と比べて、マヤちゃんを探し出す

のに時間がかかったし、難易度がなぜか確実に上がってる』

「そうか……」

しばらく沈黙が流れた。マヤちゃんをそばで支えてあげられる人が家族以外にももつといたらよかったんだけど、そううまくはいかないみたいだった。

『今の調子なら、数日内にはメグちゃんの世界を確定させて接続できるはずだから、それまでマヤちゃんのことを、特に注意して見守ってほしいんだ。マヤちゃんの頭の良さと行動力だと、たとえお金がなくなっても、百の橋と輝きの都^{ミヤコ}くらいなら勝手に行ってしまえばいいから』

「わかった」

心からの願いもむなしく、ココアお姉さん（仮）と私達の心配は、急速に現実のものになっていった。

木曜日、街なかで会ったマヤちゃんは、数日前に見た姿が嘘のようにやつれてしまっていた。

「マヤか？」

「マヤちゃん？」

「……あ。リゼ、ココア……」

声掛けにワンテンポ遅れて気づいて顔を上げたマヤちゃんの顔は、こころなしか細くなったように見えた。

「どうした？ ひどく疲れているように見えるが……」

リゼちゃんの言葉に一瞬びくつ、と震え、それから目を伏せて弱々しく首を横に振った。

「大丈夫……ココア達もメグの手がかり、探してくれてるんだよね？ ありがとう……」

マヤちゃんが異常な疲れ方をしているのは誰の目にも明らかだった。

「マヤは休んだほうがいい。私が中心になって探すから。大学生で暇もかなり自由に作れるし」

リゼちゃんの言葉に、マヤちゃんは再び力なく首を横に振った。

「うん……大丈夫。メグの手がかりは私の方が探しやすいし。みんな……ナツメもエルも、フユも、チノもここにいないんだよね？ だから……探さなきゃ。私は大丈夫だから……」

「ちよ、」

私もリゼちゃんも、視線を合わせないままゆっくりと去っていくマヤちゃんを引き留めることができなかつた。

数日後、私はラビットハウスにみんなを緊急招集した。千夜ちゃんと一緒に

ラビットハウスに帰り、シャロちゃんとりぜちゃんもそう待たずに来た。

「今日集めたのには深い理由があるんだ」

私の呼びかけの中身は、みんなもう理解しているようだった。

「ええ……」

「何とかしなきゃね」

みんな、昨日、今日とマヤちゃんを目撃していた。この数日間ですらにやつれ、ご飯も食べているかどうか怪しく見えるまでになっていた。少なくとも、睡眠不足に陥おちいっていることは明らかだった。

「マヤの親御さんに話を聞いたんだが、昨日帰ってきた時にあまりにも様子が変だったから何とか寝かしつけたらしい。今朝は朝早くからいなくて、学校に飛び出していったかと思ったら、学校から登校していないと連絡があつて、そこから手分けして探しているそうだ」

リゼちゃんからの報告に、みんな絶句した。

「私達も手分けして探すしかないな。この後すぐに親父に依頼して、屋敷の護衛に動いてもらって木組みの街を根こそぎ探す。いいか？」

その提案に頷き、みんなですぐにラビットハウスを出た。

探す地区を分けて見て回ることに約二時間、川のそばにある広場に何回目かにとどり着いた時、ベンチに独り座っているマヤちゃんを見つけた。

「マヤちゃん！」

「あ……ココア……」

「良かった……」

マヤちゃんに抱き着いた。ほんの数日しか経っていないはずなのに、明らかにさらに痩せてしまっているような感じがした。すぐにみんなに連絡を取

ろうとしたところ、弱々しい声で、待つてほしいと頼まれた。

「母さんへの連絡の前に、十分だけ時間が欲しいんだ……ラビットハウスのみんなには先に伝えてもいいから……」

少し考えて頷き、みんなにその旨のメッセージを送ってからラビットハウスに連れて行った。

ラビットハウスにはもうみんなが戻ってきていて、マヤちゃんを代わる代わる抱きしめた。

マヤちゃんが話を始めるにあたり、みんなにあるものが渡された。

「チラシ？」

「それ……本当ならメグンちがあるはずの場所で拾ったやつ……。みんなで旅行に行った街の、たぶんビルの空き部屋の情報のチラシみたいなやつだと思おう」

覗き込んでみると、バレエスタジオにでも使えそうな感じの部屋の募集広告だった。

「メグのいる世界とつながったら、メグはそこにいるんじゃないかな……」

「なるほど……わかった。捜索に協力してくれている姉ココア——並行世界の少し年上のココアにも伝えてすぐに手配する」

「ありがとね……。じゃあ、今度こそちゃんとうちに帰るから」

ひどくやつれたままのマヤちゃんは私達と視線を合わせずにそうつぶやき、よろよろと立ち上がってラビットハウスを出ていこうとした。その姿を見て悟った。このままだとまた休まずにメグちゃんの手がかりを探しに行きかねない。このままではいよいよ危険な気がした。

ごめん、マヤちゃん。ちよつと手荒な真似を取らせてもらおうよ。

「サキさん」

「どうぞ」

「マヤちゃん、とりあえずこれ飲んで」

事前に連絡して用意してもらっていたとあるお茶をマヤちゃんの前に置いた。焦点しんちゆうてんの定まらない目でポットとカップを見るマヤちゃんに、その中身を一口飲ませた。その瞬間、糸が切れたようにマヤちゃんの身体が崩れ落ちた。

「ココア、サキさん……何を飲ませたんだ」

「カモミールティーよ。本当はこんな即効性があるわけがないから、多分どの飲み物を飲ませても眠りに落ちちゃったと思う。……マヤさんのお宅に連絡するわ」

死んだように眠るマヤちゃんをソファースペースに横たえ、その間にサキさんがマヤちゃんのお家に連絡して、ご家族の方に迎えに来てもらった。

この後、ココアお姉さん（仮）も緊急招集してさらに話し合いを始めた。

「正直、マヤがここまで追い詰められているとは思わなかった」

「うん」

「一〜二週間でああなるって、相当よね」

『わかった。予定よりちよつと多めにエネルギーを消費するけど、メグちゃん
のいる世界に今からつなごうと思う。エネルギー消費を最小にするならあと一
週間は待った方が楽だけど、今回は待つていられないみたいだし』

「本当に行けるの？」

『大丈夫。シャロちゃんを探しに行ったときのようないまはしない。マヤちゃん
が発見してくれたそのチラシのおかげで、これでもだいぶ時間とエネルギー
を節約できてるから』

「そうか。なら頼む」

「私も何でもやるよ！ あのステッキにボコボコにされても構わないから！」
『その覚悟、しかと受け取ったよ。木組みの街のいつもの場所で、あと二時間
ほどで日の入りだから、エネルギーをより節約できるそのタイミングでやりた
いと思う』

「「了解」」

必要なものの指示を受け、さらに遠くからでもまがまがさきさきを感じるようになってしまった危ないステッキを取り出し、日の入りの十五分ほど前に、いつもの見晴らしの良い高台に集合した。さすがに少し蒸し暑いからか、前回来たときみたいにカップルがたくさんいるということはなかった。

ここにいるのは私、リゼちゃん、千夜ちゃん、シャロちゃん、そしてティッピー、ティッピーを介してつながっているココアお姉さん（仮）だけ。マヤちゃんはもつと休ませるべきという意見で一致したため、ここには呼ばな

かった。

『太陽が地平線の下まで下がりきった瞬間に発動させるから、そちらでチエツクして、あの「じゅもん」を唱えてね』

「わかった」

みんなで遠く、沈みゆく太陽を見つめ、その瞬間を待つ。

「ココア、そろそろだ」

「うん」

ステッキを構え、日が沈んだ瞬間、叫んだ。

「サイエンティフィックマジカルフュージョン！ 世界の扉よ、開け——！」

いつもより強めの、風にも似た、目に見えない圧が吹き抜けるのを感じた。

『……ふう。接続完了したよ。そしてメグちゃんの居場所も分かった』
その場所はやはり、百の橋と輝きの都だった。

☆ ☆ ☆

マヤちゃんへの連絡は、明日金曜日の夕方に行くことになった。ひとつはこちら側での準備時間を取るため、もうひとつはリゼちゃんが想定したある事態を防ぐためとのことだった。そのある事態の中身については教えてくれなかった。

「マヤのことを考えると、私達もすぐに動けたほうがいい。だが、ココア達は

高校があつてまだ夏休みまで日があるし、今週末と来週末は私が先行して動く。もう親父には今日からの流れで人の搜索として動いてもらうよう約束を取り付けた」

「すごい……リゼちゃんが指揮官みたいだ……」

「チマメ隊の指揮官だからな。部下の搜索と救出には全力を尽くす」
いつもの何倍もかっこいいリゼちゃんに拍手を送った。

金曜日になった。昨日の今日ということで、マヤちゃんの様子伺いと称してサキさんからマヤちゃんのお家に連絡してもらい、マヤちゃんが今日は学校を休んでいることを確認した。その時に、夕方私とリゼちゃんがマヤちゃんのお見舞いに行くことの許可ももらった。

夕方まではいつも通りの行動をした。私はいつも通り高校に行つて授業を受

け、リゼちゃんも大学へ行った。両方とも一日の活動を終えてラビットハウスに戻ってきてから、お見舞いの品を持ってマヤちゃんの家へ。

家ではお母さんが出迎えてくれ、マヤちゃん保護のお礼をされた。今日はしっかり休み、だいぶ元気になっっているらしい。マヤちゃん部屋に案内され、意を決して足を踏み入れた。

「リゼ……ココア……」

マヤちゃんはまだ元気がなかったけど、目の下の隈は消えて、血の巡りも良くなっている印象に戻っていた。

「まだだいぶやつれたままだが、昨日よりは格段に顔色が良くなった」

「ご飯を食べると、よく寝るのは大事だよ」

私達の言葉に、マヤちゃんは小さく頷いた。

「うん……ごめん」

「さて、昨日マヤを眠らせた後、今朝までに大きな動きがあった。正確には予定を繰り上げて実行した。……この世界を、メグがいる世界とつないだ。つまりメグはこの世界にいる」

「ほんとっ!？」

マヤちゃんが目を見開いてすごい勢いでリゼちゃんに迫った。リゼちゃんが若干気圧けおされつつも続けた。

「マヤが見つけた手がかりのおかげで居場所もかなり早く早く掴めた。場所は、百の橋と輝きの都、例のみんなで旅行に行った大きな街だ」

「そうなんだ……あそこに」

マヤちゃんの目の色が明らかに変わったのを感じた。リゼちゃんも感じ取ったようで、この反応も想定に入れていたのか、すぐに釘を差した。

「あの街まではここから電車で何時間もかかるし、もし行くとしたら電車でや

宿代、その他諸々お金がかかる。今、メグを探しに行くための準備を急いで整えている。みんな学校があるから出発は土曜日になるが、あと少し待っていて欲しい」

「……わかった。ありがとりぜ」

お礼を述べたマヤちゃんの声は元気がなかった。一刻も早く探しに行きたいのは間違いないだろうし、そこを待てと言われた時のがっかりする気持ちは痛いほどよく分かった。

マヤちゃんの家をおいとましてからの帰り道、リゼちゃんは何か考え込んでいた。

「ココア」

「どうしたのリゼちゃん？」

「明日は早朝から出かける必要があるそうさ。もしかしたらそのまま土日とも

ラビットハウスの仕事を休むことになるかもしれない」

「それってマヤちゃんに関係すること？」

私の質問に、リゼちゃんはため息混じりに返した。

「察しが良いな。あいつのことだ、ほぼ確実に親御さんや家族の目を盗んで家を抜け出して、あの街に行く。おそらく明日朝一に駅に行つて長距離列車に飛び乗るに違いない。私は張り込みに行く。もし見つかったら、家に無理やり返してもすぐに同じことをしそうだから、ひとまず一泊二日は同行する」

「わかつた。その時はマヤちゃんをよろしくね」

「まかせろ」

リゼちゃんの読みは当たつた。

朝起きてスマートフォンを見たら、リゼちゃんからメッセージが入つて

いた。

『朝一でマヤが駅に現れたからただちに確保した。一緒に都に向かってる』
『わかった』

とりあえずメッセージを送った後、一応リゼちゃんに電話をしてみたら、すぐに出てくれた。

『おはようココア。まあ、メッセージの通りだ。マヤと二人で電車で揺られている』

「長旅気をつけてね……」

『ああ、マヤのエスコートは任せろ。ちなみにマヤのご家族への連絡はうちからしている。ココアはいつも通り仕事をして、あとは姉ココアから何か連絡があつたら取り次いで欲しい』

『まかせて!』

リゼちゃんとマヤちゃんの動きは千夜ちゃんとシャロちゃんにも伝えた。ものすごく驚いていて、甘兎庵では抹茶がぶち撒けられ、フルール・ド・ラパンではハーブが空を飛んだらしい。サキさんとタカヒロさんには、昨日夜にリゼちゃんが休むことはリゼちゃん自身から伝えていたけど、今朝から都の方に行っていることは伏せていた。

私は普通にお仕事をしていたつもりだったけど、マヤちゃんのことばかりずっと気にしていたのか、ちよつとしたミスがいつもの何倍にも増えていた。

「ココアちゃんココアちゃん、コーヒーがあふれてる!」

「……え? あつ! ごめんなさい!」

気がつくのと、カップからあふれたコーヒーがカウンターに広がろうとしていた。

「ココアちゃん、なんか今日はいつもにましてぼーっとしてる気がする!」

じーっ、とこちらを見るサキさんの表情はとても心配そうだった。

「うん……ここ何日かのマヤちゃんがずっと気になっちゃって」

「そうねえ。人探しをしてるのよね」

「リゼちゃんの頼みで、リゼちゃんのお父さんとその部下さん達にも動いてもらってるんだけど」

「そうなの。あの人が動いているなら大丈夫だと思うわ。必ず見つかる。いざとなったらタカヒロさんも力になるって言ってくれてるし」

「ありがとうございます！」

「早く見つかるといいわねえ……」

メグちゃんのいる街は分かった。千夜ちゃんの時みたいになり、事が進むなら、この土日のうちにでも会うことができるはずだった。

お仕事の休憩時間の時、ちょうどリゼちゃんから定時報告が入った。

『今のところ収穫無し』

『マヤちゃんはどんな感じ？』

『完全に別人のようだ。いつもならぴよんぴよんどこにでも行きそうなところだが、こつちに来てかえって沈んでしまっているみたいだ。そのせいであまり見張らなくてもいいのは皮肉なものだが』

『そうなんだ……』

すぐにでもみんなであちらに行って探すのを手伝いたいところだったけど、学校もあるし、諸々の準備もあるから、今週は自由に動けるリゼちゃんに任せ、できるだけ早く見つかることを祈った。

でも結局、今日は嬉しい報告を聞くことはできなかつた。

夜、ココアお姉さん（仮）に連絡を取った。

『えっ!? もうマヤちゃんあの街に飛び出していつちやったの!?』

「うん。朝一の電車で木組みの街を抜け出そうとしたところをリゼちゃんが捕獲して、お目付役としてついて行っただけ」

『マヤちゃんアグレッシブ……』

「ただ、マヤちゃんが完全に沈んでしまつてるとかで、マヤちゃんがマヤちゃんじゃなくなつてしまつてみたいで……」

『うーん、ちよつとまづいかもそれ……』

ココアお姉さん（仮）は唸るような声を出してしばらく考え込んでしまった。

『マヤちゃんは特にメグちゃんのことを気にしているから、マヤちゃんの力に頼るかどうかはさておき、絶対に負担がかかってしまうことは確かだったんだ

けど、ちょっと予想以上だったかも』

「そうなんだ……」

『事は急を要するね。本当はみんな高校を休んででも街に行つて、一刻も早くメグちゃんを見つけて記憶を取り戻させてほしいところだけど、そうそう簡単に高校は休めないと思うから、来週土日に行けるように準備をしてくれないかな？』

「わかった」

本当は今すぐにでも動きたかったけど、夜なのでそもそも都に行くための交通手段がない。今はまだリゼちゃんとマヤちゃんに任せるとき時だとは分かっている。でも落ち着かない。

落ち着かなくて、この日はよく眠れなかった。

翌日、もつと悪いニュースを聞くことになるを知っていたら、頑張つて寝たのに。

日曜日、ラビットハウスでのお仕事はお休みで、千夜ちゃんの家にはシャロちゃんともどもお邪魔している時に、リゼちゃんから短いメッセージが届いた。

『ファーストコンタクト、失敗。帰投する』

そのメッセージの意味するところを私達もすぐに理解した。誰も何も言えないまま、しばらく時間が経過した。

「……とりあえず、温かく迎えられるように準備はしましょう？」
シャロちゃんの言葉に頷き、みんなでラビットハウスに向かった。サキさん

にマヤちゃんがリゼちゃんと一緒に都に行つて、今帰つてきていることを知らせ、できる限りのことをしようと思ひなで準備をしていたら、結構時間が経つていた。

それからほどなくして、マヤちゃんとリゼちゃんが帰つてきた。メッセージが入つてから数時間、やはり、百の橋と輝きの都^ミが遠いことを痛感させられる時間だった。リゼちゃんは疲れ切つた顔で、そしてマヤちゃんは深く俯^{うつむ}き、表情をうかがい知ることすらできなかった。

ホットココアを差し出すと少しづつ飲んでくれたけど、結局、リゼちゃんと一緒にラビットハウスを出発するまで押し黙つたままで、一言もマヤちゃんの声^{こゑ}を聞けなかった。

リゼちゃんがラビットハウスに戻つてきてすぐ、何度目かの緊急会議となつた。話が話なのでラビットハウスのホールではなく私の部屋に集合して、ココ

アお姉さん（仮）も呼んだ。

唯一立ち会っていたりぜちゃんの口はとても重かった。

「今日午前中にメグには会えた。会えたんだが——」

出方を間違えた。不審者と間違えられてこっぴどく拒絶された。マヤはそれで深く傷ついてしまった。それがりぜちゃんからの報告の全てだった。

「『お二人は誰なんですか。知らない人にはついていっちゃダメだって、お母さんに言われているの』というのがメグの第一声だった。それに気が動転したマヤがいろいろ話して、手を取ろうとしたら振り払われてな……。最後に、元の世界のメグが絶対出さないような冷酷な声で『ついてこないでください』って言われた」

「そんな……」

思ったよりも悪い事態だった。今までは、最初の時に私がりぜちゃんにモデ

ルガンで脇腹をぐりぐりされたハードなコンタクトだったのを除けば、とても和やかに出会えてうまく合流できていたので、今回のように相手に拒絶される事態は考えもしていなかった。

「動けなくなつたマヤと一緒に、親父が寄越してくれた車に乗って木組みの街まで帰ってきた。マヤは泣かなかつた。……泣くことすらできなかつた、と言つたほうが正確かもしれないが」

私も、ほかのみんなも、何も言えなくなつてしまった。

「来週マヤは行けない。親御さんに叱られて今週末は家にいるよう言われているからだが、それが無かつたとしても、しばらくはあの街に行けないと思う。……正直、マヤが木組みの街から出られないようにした方が良かったと後悔した」

「そうだったんだ……」

『ごめん……ここまでの事態になるって読めなかった』

ココアお姉さん（仮）の声も明らかに苦しそうだった。

「どうしたらいいのかしら」

千夜ちゃんをつぶやきに、みんなため息をついた。ため息をつく以外にできることが思いつかなかった。

「来週末は私達だけで動くしかないわよね？」

「そうするしかないと思う。私達がメグちゃんの誤解を解くことができれば、またマヤちゃんとメグちゃんが会って話ができるチャンスが生まれるよね？」

私の確認に、向こうの私も同意してくれた。

『うん。時間を空けすぎるとこじれる可能性が高いから、ひとまず次の接触は来週、できれば高校生組みんなで。たとえ何回もかかるとしても、間をできるだけ空けないようにしたい』

「わかった。ただ、マヤを見守る、あるいは——言い方は悪いが『見張る』奴が家族以外にいりそうな気がする。私はそちらの任務につこうと思う」

本当は捜索に加わりたいが、マヤちゃんのこともさておき、リゼちゃんがいると逆に警戒される可能性があるから、とのことだった。

「来週末はココア達三人で頼む。再来週の後半からココア達の高校やうち、とどうかシャロのところも夏休みだったよな。もし解決が長引くなら、再来週早速一週間くらい合宿みたいに集中して滞在して、接触を図るのがいいかもしれない」

『長期間のお泊まりはなかなかお金が掛かるから、いざとなったらみんなの空間転移くらいはできるように技を開発しようと思うけど。とどうか少しずつ進めてるんだけど……』

「なんだか姉ココアはすごいな。ま、なんとかしてみるさ。親父に頼りまくる

のも申し訳ないが、今はマヤとメグが第一だ。土下座してでも許してもらおう」
差し当たり来週末までは木組みの街で準備を重ねつつ、マヤちゃんに立ち直ってもらおうための取り組みに力を尽くすことを決めて解散した。

週末までに、リゼちゃんのお父さんの部下さん達が集めてくれたメグちゃんに関する情報を確認して、ココアお姉さん（仮）にも伝えた。

まず、メグちゃんは一家で、百の橋と輝きの都に住んでいる。学年は小学六年、元の世界よりかなり年下になっていた。そのせいで元々警戒心が高くなりやすかったのはあるかもしれない。

人間関係については、この世界ではメグちゃんは木組みの街にいたことはなく、メグちゃんのお母さんが若い時にいただけらしい。お母さんがバレエ教室を開いているのは元の世界の通りで、メグちゃんがバレエを習っているのも元

の世界の通り。ただ、この数日に部下さん達が調べられた限りでは、メグちゃんのみまわりには友達らしい子の姿が現れた様子はなく、家と学校との行き来はいつも一人だったらしい。

加えて、部下さん達のサーチ能力によれば、リゼちゃんとマヤちゃんがファーストコンタクトに失敗して以降、周囲への警戒度が数段増している動きをしているとのことだった。

「難易度が十倍増しとか百倍増しになってないかな……?」

『うん……それは否定できないね……。ただ、私の計算と見立てでは、そちらの私であれば難関を突破できると確信しているよ』

「ほんと?」

『ほんと。むしろ「私」しかいない、かな』

「そうなんだ……」

リゼちゃんがしばらくメグちゃんの前に姿を見せられないなら、本格的に動けるのは事情を色々知っている私しかいないのは確かだった。

『作戦は出たとこ勝負になるけどいいかな？ 最大限の支援はするから』

「ありがとう。頑張ってみる」

『健闘を祈る』

土曜日の早朝、四人と一匹が駅に集まった。リゼちゃんは木組みの街に残り、向こうへは私、千夜ちゃん、シャロちゃんが行く。行程はまず一泊二日。

「今回は頼んだぞ」

「まかせて」

「いつてきます、リゼ先輩」

「行ってくるわ」

『気をつけてね』

リゼちゃんとティップー with ココアお姉さん（仮）に見送られて列車に乗り込み、一路都へ。今回の旅は非常に困難な事態が待ち構えていそうで、喋るしゃべこともあまり思い浮かばず、コンパートメントの室内は列車の走る音が響くばかりだった。

昼前、ようやく、百の橋と輝きの都みやこに着いた。長い時間座ったままだったので身体がカチコチに凝こってしまった。

「さて。まずはホテルに行つて作戦会議だね」

今回も滞在先として、青山さんと縁が深いホテル、ロイヤル・キャッツを選んでいた。青山さんに連絡を取ってもらつて、この土日と、再来週の一週間分お泊まりの予約を入れている。

「おー！」

「で、ロイヤル・キャッツに行くにはどの電車に乗ればいいんだっけ？」
シャロちゃんの言葉に固まってしまった。

「え、えーつと……千夜ちゃんは知ってる？」

「ごめんなさい。あの時のルートを全然覚えてなくて」

「シャロちゃんは？」

「わからないわ……」

街に來た瞬間道に迷う。一回休み。

一回休んだところで観光案内のカウンターを見つけ、道順と乗るべきトラムを教えてもらった。トラムの行先表示をよく確かめて乗り、さらに停留所の名前を見比べること数回、なんとか無事にロイヤル・キャッツの最寄りに着いた。少し歩いてあの不気味さ漂うホテルの姿が見えたときにはとてもほっと

した。

「ようこそ。お久しぶりでございます」

「お世話になります！」

「ごゆつくりおくつろぎください」

支配人さんと副支配人さんに案内されて部屋に行き、荷物を置くのもそこそこにて作戦会議に入った。

「さて、まずはメグちゃんの姿を捉とらえるのが最優先なんだけど、あのふわふわウェーブのほわほわな感じを頼りに探せばいいのかな？」

私の確認に、千夜ちゃんとシャロちゃんからの返事は首振りだけだった。

「リゼ先輩のレポートから推測するなら、おそらく私達が知っているメグちゃんの姿は全くあてにならないと思ったほうがいいわね」

「リゼちゃんやマヤちゃんに対してとても冷たかったみたいだし、それ以降は

とても警戒しているらしいから、正反対を想像して覚悟しておいたほうがいいかも」

「そつか……」

先週の話进行を思い出した。確かに私達が知っているほわほわな姿だったら、マヤちゃんやリゼちゃんのことを拒絶したりはしないよね……。

「このメグちゃんの服装とか髪型とかかってどんな感じなのかしら」

「ココア、リゼ先輩から何か写真とか送られてきてる？」

シャロちゃんに促され、リゼちゃんにメッセージを送って聞いてみたけど、残念ながら写真は無かった。

『すまん……直接コンタクトを取った時は撮れなくて、親父の部下もなぜか撮影ができていないらしい……』

姿に関する手がかりが一気に減ってしまった。

『もちろん顔は元の世界のメグの通りだ。ただ、あんな怖い表情は初めて見たし、もしかしたらココア達は初見では区別できないかもしれない』

その他、リゼちゃんが会った時、リゼちゃんのお父さんの部下さん達が遠目で見た時の服装の特徴が文字で送られてきた。イメージはなんとか組み上げられた。最後に、メグちゃんの家のある場所の予想図、通っている学校の場所を受け取って通信終了。

「ひとまず、メグちゃんの家があるあたりに行ってみる？」

「そうしましょうか」

「それがいいわね」

軽装でホテルを出て、またトラムで街の中心部へ向かった。外はだいぶ暑くなってきたけど、車内は涼しくて助かった。

ホテルからだいぶ離れたところでトラムを降り、地図に従ってさらに歩い

て、メグちゃんの家がある地区に到着した。千夜ちゃんを捜しに来た時に、千夜ちゃんの家があった場所とは少し離れていた。

「家がどこか、さすがにひと目で見るのは難しそうね」

「バレエスタジオが併設されていたら簡単なのだけれど、この地図を見る限りではそれらしき建物はなさそう」

「家の表札を覗き込んで回るのも怪しすぎて通報されちゃいそうな感じだし」

この住宅地は人通りが少ないので、そこに高校生の女子が三人いるだけでも悪目立ちしていた。ここはひとまず退却。

「で、次はメグちゃんの通っている中学校だけれど、もちろん土曜日はお休みよね」

「一応、まわりに手がかりがないか探してみたいから、行ってみよっか」

希望を口にしつつ十数分の道程みちのりを歩いていったけれど、中学校では部活動の

子たちの姿がちらほら見えたくらいで、やはりメグちゃんらしき姿は見つけられなかった。

一時間も経たないうちに、当初思いついていたことができることをやり尽くしてしまい、手持ち無沙汰ぶさたになつてしまった。……ううん、この状況を表すにはちよつと違つた。もつといい単語があとひとつあつた。

「詰んだ……」

「縁起の悪いこと言わないでよココア……そうとしか言いようがないけど」

「ちよつと焦りあせすぎだったのかも私達」

見事に行くあてをなくしてしまつたほか、さらに悪いことが二つあつた。

「スマートフォンがなぜかみんな電池切れ、そしてホテルへの帰り方のメモと地図はスマートフォンの中……」

「追加充電したつもりだったのだけれど、部屋のコンセントが壊れていたのかしらね……」

今度こそ。

「「詰んだ……」」

ひとまず表通りに戻って、通りかかる人たちに尋ねてトラムに乗って、なんとか大きな駅までは戻れたけど、その先の道が分からなかった。誰かが私達の記憶を消しているんじゃないかと思えてしまうくらい記憶がおぼろげになってしまっていて、ロイヤル・キャッツに行く時にトラムをどこで降りたのかも思い出せなかった。

「えーつと、……とりあえずご飯にしよう！」

「そうしましょう」

「そうね」

さすがに喫茶店やレストランを探すのに失敗したり苦勞したりすることはなく、ふと目に入ったお店に入ったら大当たりだったのは嬉しかった。ただ、美味しい料理の写真を思い出のひとつとして撮れなかったのはちよつと残念だった。

「ねえねえシャロちゃん、ラビットハウスでこんな感じのパエリア出したら面白そうだと思うんだけど、どうかな？」

「作ること自体はタカヒロさんなら難なくできそうだと思うんだけど、本業が喫茶店でしよう？ 材料の調達量からしたら大赤字になったりしない？」

「うーん……確かにパエリア出そうとしてラビットハウスが潰れちゃったら困っちゃうね」

「さすがねシャロちゃん。日頃から財布の中身を吟味しているだけあるわ。私も見習わなきゃね」

「千夜、あんたも経営者目指してるんだから日頃からやってるんじゃないの?」

「そうねえ……おばあちゃんの帳簿は横で見て勉強させてもらっているけれど、私が仕切っている創作和菓子の予算は別腹だから」

「そこは実践しなさいよ……」

「いざとなったら経理はシャロちゃんにお願いするわ♪」

「……そうね、考えとく」

腹ごしらえをして、また気を取り直してロイヤル・キャッツへの帰り道探しを再開したものの、やはりなぜか手がかりが掴めなかった。

昼前に訪れた観光案内のカウンターはなぜか臨時休業になってしまっていた

ので、まわりの街の人に尋ねて回ったものの、ロイヤル・キャッツの名前を出しても首を傾げられるばかりで、本当にあのホテルが存在するのかどうか、私達にとつても怪しくなつてきてしまつた。

「こんなことつてある……?」

「まるで誰かが私達をこのまま彷徨さまよわせようとしてるみたい……」

ひとまずメグちゃんの家がある方向と別方向のトラムに乗つて、かすかな記憶を頼りに何個か進んだ先の停留所で降りた。でも、まわりを見渡してもロイヤル・キャッツの姿は見えなかつた。

万事休す。近くにあつた街の地図の前で立ち尽くしていると、後ろから声を掛けられた。

「何かお探しですか?」

振り向くと、ストレートなロングヘアの女の子がいた。小柄で、歳の頃は

中学生くらいか。クールビューティーという表現がふさわしい佇まいの子だった。

「あ、はい。ホテル、ロイヤル・キャッツ」というところを探してて……」

「それならここです。歩くと十分くらいかかります」

彼女が指さした先に、確かに「ロイヤル・キャッツ」の名前があつた。さつき何度見ても見つからなかつたはずの文字がなぜかあつた。

「あつた！ ありがとう！」

「どういたしまして。この先もお気をつけて」

クールビューティーな女の子は終始クールで、しかしそれでいて冷たさは感じなかつた。静かに去る彼女に手を振り、千夜ちゃんとシャロちゃんがいる方を振り向くと、二人が口をあんぐりと開けたまま固まっていた。

「千夜ちゃん？ シャロちゃん？」

「…………え？ ええ、…………あ！ ココアちゃん！」

「どうしたの？ ふたりともおぼけでも見たような顔になってるよ？」

「ココア…………気づかなかった？」

「何に？」

「「さっきの、メグちゃんだったわ」」

「えっ…………ええーっ!？」

二人の口から発せられた言葉に、私は絶句するよりほかなかった。慌ててあたりを見渡したけど、クールビューティーな彼女の姿はすでに無かった。

その後、嘘みたいにあつさりとロイヤル・キャッツにたどり着けた。途中で一回道を聞いた近所の人もロイヤル・キャッツのことを知っていて、近道を教えてくれた。

「無事に着けたね……」

「ええ……」

フロントで出迎えてくれた副支配人さんも、もちろん本物だった。

まだなにかに騙だまされているような気分になりつつも、部屋に帰り着いてすぐにベッドに倒れ込んだら、ほっとした流れでそのまま忘れてしまった。ハードな一日だった。

夕食はロイヤル・キャッツの中のレストランで食べた。最初に来た時は使われなくなっていて寂さびしかったスペースが、今は人がそこそこ入っている落ち着いた空間になっていた。

「明日どうしよつか？ 私としてはクールビューティー・メグちゃんにまた会いたいと思うんだけど」

私の提案に、二人とも賛同してくれた。

「私も同感。根掘り葉掘り話を聞くと絶対に警戒されるから、偶然を装った再会で軽く挨拶して、私達のことを印象に残しておきたいわね」

「そうよね。問題は、どこに行ったらあのメグちゃんと会えるか、だけど」

「うーん……おうちの近所に押しかけたらあまりにも怪しすぎるし」

「誰かに遠く離れたところから搜索・発見してもらってからそこに行ければいいんだけど」

シャロちゃんの言葉にしばらく考え、ふと思い出した。

「そういえば、リゼちゃんのお父さんの部下さん達って、メグちゃんがここにいたことを掴めてるんだっけ？」

「さあ……？ 特に連絡が——あ！ 私達のスマホ全員電池切れしちゃってるじゃない！」

「「そうだった！」」

慌ててスマートフォンとコードを取り出してコンセントにつなぎ、今度こそきちんと充電が始まったことを確認した。電源を入れると、グループメッセー
ジにリゼちゃんからのメッセーが怒濤どとうのごとく連続して入っていて、通知も
大量に現れた。グループ通話を入れた瞬間すぐに応答があり、リゼちゃんから
の叫び声が飛び込んできた。

『ココア千夜シャロ！ 無事か!?!』

「ごめんなさい！ 何か色々あつてスマートフォンの電池が切れたり、道に思
い切り迷つたりしてたの」

『そうか……良かった……』

リゼちゃんからは驚きの情報を聞かされた。私達がホテルを出たくらいの時
刻に、リゼちゃんちとこの街に來ている部下さん達との間の連絡が一旦途切
れて、数分後に再度つながった時から、それまで追っていたはずのメグちゃん

の居場所が全く掴めなくなったらしい。さらにリゼちゃんからの緊急依頼で私達のことまで捜索していたけど、たつた今までもどこにいるかも完全に見失っていたとのことだった。

「なんだか、私達が神隠しに遭^あっていたみたいね……」

『だな。何かおかしなことが起きていた。世界がバラバラになったり、私達の年齢が食い違っていたり、また元に戻れたりするくらいだから、何があってもおかしくはない。ないが、これは今まで経験したことがない』

「うん。でも、メグちゃんには会えたよ。あと、一度会った後からは不思議なことが起こらなくなつたみたい」

『メグに会えたんだな……そうか』

「クールビューティーだったから私は気づかなくて、千夜ちゃんとシヤロちゃんから教えられて初めて分かつただけ」

『クールビューティーというか……私とマヤの最後の印象だと冷酷ささえ感じ
てしまうほどだった』

少し震えた感じの声だったリゼちゃんに、私からの見通しを伝えた。

「私の感触だと、あの感じだったらすぐに仲良くなれそうな気がする。もし
もつと冷たくなっても、少し時間を掛けたら妹として迎えられると思う！」

『ハハハ……ココアらしいな。でも今はその言葉が一番心強い。頼んだぞ』
「らじやー！」

そして、あとひとつ確認しておくべきことがあった。

「ところで、マヤちゃんの様子は……？」

リゼちゃんに尋ねると、一転して重苦しい雰囲気になったのが電話越しにも
分かった。

『見た目上は元気になった。元の通りに明るく振る舞っているように「見せている。」私だけでなくマヤの母親や兄貴もそれが空からげん元気きだと見抜いていて、なんとか無理に頑張るのをやめさせようとしているんだが効き目がない……』
事態はあまりよくなさそうだった。

「わかった。慌てずに急いでメグちゃんを取り戻す活動を進めようと思う」

『よろしく頼む』

明日はメグちゃんを探してもう一度お話をして、木組みの街に帰る。部下さん達からの偵察情報は、入り次第すぐにリゼちゃん経由で知らせてくれるとのことだった。

翌朝、実質的にはノープランにも等しい状態だったけど、ひとまず街の中心部、駅のあたりまでまっすぐ出てからいろいろ見つつ情報を待つことにした。

今度は記憶がおぼろげになるような変な事態は起こらなかった。

「卒業旅行で来た時は、この先しばらくここに來ることはないのかなって思ってたけど、それから結局二回来たし、再来週も來ることになっているし、ずいぶん街を見慣れちゃった」

「そうね。私なんてここに住んでいたことになっちゃったものね」

「ほんと……とても変な気分」

街並みを眺めながら遠い目をしてしていると、リゼちゃんから連絡が入った。

『そこから徒歩数分圏内の大きな公園。一人』

「了解」と返事を打ち、公園へ。クールビューティー・メグちゃんの姿は遠くからでもすぐに確認できた。一人で池のほとりをとことこ歩いている。

どのように接触しようか考えつつ後ろから追うように歩いていると、横の方から小さい子が乗った三輪車が転がってくるのが見えた。思ったよりもスピー

ドが出ている。さらに後ろからお母さんらしき人が必死の形相ぎようそうで追いかけていた。その向かう先にはメグちゃん、そして池。

「あぶない！」

ダッシュして三輪車とメグちゃんの間割り込もうとして、手前で何かつまみに躓つまづいてそのままズザザとスライディングする形になり、さらに脇腹に三輪車のタイヤがクリティカルヒットした。

「ぐええ……」

「ココア！」

「私はだいじょうぶ……初めてあの呪いのステッキに感謝したよ……」

撃ち抜かれ慣れて（？）いたせいで、大したダメージにならずに済んだ。すぐにお母さんが駆け寄ってきて、そしてその反対側にいたメグちゃんがしゃがみ込んでこちらを覗のぞき込んだ。

「大丈夫ですか、お姉さん？」

「私的にはオーケーです……」

小さい子のお母さんが謝罪と感謝を述べて去っていった。服の弁償の申し出もあつたけど、そちらは断つた。近場のベンチに、クールビューティー・メグちゃんを含む四人で座つて一息ついた。シャロちゃんに買ってきてもらった冷たいジュースの缶をメグちゃんにも渡す。

「はいどうぞ！」

「いただきます」

缶を開けて、私が半分くらい一気に飲んだ一方で、他の三人はかわいらしく一口だけ飲んでいた。

「おでかけした先で人助けをすることになるとは思わなかったけど、助かった

のでとりあえずよし！」

「ココアちゃんの服、だいぶすすけちゃったけど……」

「これは家に帰って洗えば大丈夫！」

千夜ちゃんの声掛けに胸を張って自信満々に返した。それを横で聞いていたメグちゃんは感心した感じの声をもらした。

「お姉さん、すごいですね……」

「いやーそれほどでもー、えへへ」

私の返事に対して、クールビューティー・メグちゃんの口元に少しだけ笑みのような表情の変化が生まれた。

「お姉さんといると、なんだか毎日が楽しくなりそうです」

「そう言ってくれると嬉しいな♪ あ、私ココアって言います！ 隣がシャロちゃん、その隣が千夜ちゃん！」

「奈津恵なつめぐみって言います」

「恵ちゃんかー。メグちゃんって呼んでいい？」

「いいですよ。よくそのように呼ばれます」

クールビューティーな感じだけど、リゼちゃんが言っていたような冷たさは感じなかった。

「人違いかもしれませんが、お姉さん達は確か昨日、東の方の町で道に迷っていませんでしたか？」

「うん！ あ、ひよつとしてあの時のロングヘアの子？」

正体はあれのすぐ後に知っていたけど、いかにも初めて知ったかのような感じで返事をした。

「はい。あの後無事にホテルに着けましたか？」

「ばっちり！ とても助かったよ！」

「それは良かったです」

再びのかすかな笑み。なんだかいい感じにコンタクトが取れていそうだった。

「私達、実は再来週に一週間くらいここに来る予定だったんだけど、ちょっと急に人探しの用ができて、一泊二日だけ先に来ちゃいました」

「どちらからいらつしやったんですか？」

「ここから電車で五、六時間くらいのところにある小さめの街で、木組みの家と石畳の街。って呼ばれてるところ」

「五、六時間……」

メグちゃんは目を丸くしていたけど、木組みの街の名前には特段の反応を示しているようではなかった。……さすがに一発目で思い出すことはないよね。

「本当は再来週までここにいたいんだけど、高校の授業が今週と来週あつて休

めないから、また一旦帰らなきゃいけないんだよね」

「それは大変ですね……」

メグちゃんが軽くうなず頷きながら聞いている中に、横からそつと手を上げるように千夜ちゃんが入ってきた。

「ココアちゃん、乗る電車まであと一時間くらいになったわ」

「あ、じゃあそろそろ駅に行かないと！ 再来週また会えたらよろしくね！」

「また会えたら……はい。待ってますね」

帰り際に大きく手を振ったら、メグちゃんは小さく手を振り返してくれた。

木組みの街へ帰る電車に無事乗り込み、ほどなくして電車が発車した。

「いやー、昨日はどうなることかと思っただけど、無事メグちゃんに会えてお話できて良かったー！」

「これはお手柄てがらよ。リゼ先輩から聞いた話だとメグちゃんと接触することすらできないかもって思ったけど、ちゃんと出会えて、しかも笑顔まで見せてくれるところまで話ができるなんて」

「うん。そこは良かった。だから、後はどうやってひどい別れ方になってしまったリゼちゃんやマヤちゃんと引き合わせるか、なんだけど……」

そこが問題だった。おそらく再来週、もしそのままリゼちゃんやマヤちゃんと会わせたらおそらくメグちゃんは去ってしまつて作戦失敗になってしまう。場合によつては、メグちゃんに記憶を取り戻してもらうことを優先して、それから会つてもらふようにしないといけないかもしれない。

「先週の様子を考えると、私や千夜、ココアだけでメグちゃんに働きかける必要があるかもしれないわね」

「そうね……」

本当は一刻も早く再会させてあげたいけど、それが失敗してしまつては意味がない。リゼちゃんやマヤちゃんが、百の橋と輝きの都まで来るとしても、メグちゃんとの再接触はだいぶ後回しにした方がいいかもしれない。詳しい打ち合わせは木組みの街に帰つてからしよう。ひとまず今回の作戦が一応成功したことを取り急ぎリゼちゃんに知らせた。

木組みの街に着いたら、リゼちゃんが出迎えてくれた。

「お帰り。あと、お疲れ様」

「ただいま帰りました！」

ひとまず、それぞれ帰宅した後にラビットハウスに再集合して、リゼちゃんとココアお姉さん（仮）に今回の成果を報告した。

『すごいじゃんそつちの私！ このままプランを成功させたいね』

「ありがたいなココア。うまく行ってくれてよかった」

「うん。それで次に行くのは予定通り再来週ということにして、その時はメグちゃんとうとう出会ったらいいかな。連絡先とか特に交換せずに別れちゃったけど……」

「まあ、もしかしたら持つてなかったかもしれないし、いざとなったらまた親父とその部下のみんなに頭を下げて捜索に協力してもらおうさ。親父への借りが雪だるま式に膨れ上がってるからそろそろ破産しそうだが」

「破産……ラビットハウスでのお仕事増やす？」

「甘兎庵ならお給金を倍出すわ」

「え、えーつと、私はリゼ先輩に節約生活術をお伝えできれば！」

「ま、まあ、別に金を借りているわけじゃないから……給料の心配はいらない。節約生活術は後学こうがくのために学んでおきたいところだが」

「はい！ いつでも用意はできてます！」

「その時は頼む」

再来週の計画は半分決まった。そして、次が重大な事項だった。

「それで、マヤちゃんのことなんだけど……」

「ああ。正直、見ている方が辛くなる有り様だ」

表向きは元気で、でも少しでもメグちゃんのことに触れたらそのまま壊れてしまいうさだだったから、それ以上何か言いたくても話を切り出せない状態が続いているらしい。

「だから、再来週も私は基本的にこちらにいるつもりだ。もしマヤが都の方に行こうとするなら、その時は一緒に行動しようと思う」

「わかった」

『私もできる限り支援するよ。話を聞く限りだと、そっちの私が動いてくれた

らほぼ成功しそうだから、その後の手順、マヤちゃんとメグちゃんの年齢をみんなと同じ用に揃え直すための準備をしようと思う』

「よろしくね。お姉ちゃん」

『！ お姉ちゃんって言うてくれたね私!? はなまる百点！ さすがみんなのお姉ちゃん！』

「えへへ」

「姉ココアとココアがお互いに姉と呼び合って喜んでるのは、永久機関を感じるな……」

リゼちゃんに苦笑されつつも打ち合わせはまとまった。再来週、一週間の旅行中に遂行する作戦が成功することを祈って、解散した。

再出発するまでの二週間はとても長かった。メグちゃんの記憶を取り戻した

めに、今までと同じように昔メグちゃんと一緒にになって色々やったことを、あの都にまつわるものを中心に思い出しつつ書き出し、それに役立ちそうなものを集めた。

一番心配だったのが私自身の期末テストの結果だったけど、幸い全教科良い成績だった。もし補習と再テストになっちゃってたら旅行とスケジュールがぴったり重なってしまっていて、メグちゃんどころではなかった。

現在の状況については、リゼちゃんが代表してマヤちゃんに逐一ちくいち伝えていたけど、マヤちゃんからは「そうなんだ……」という返事しか聞けなかった、とのことだった。

終業式を終え、ついに夏休みを迎えた出発前日。

「一週間の旅行、忘れ物はない？」

「大丈夫です！」

「ココア、一週間任せたぞ」

「支配人さんによるよろしくお伝え下さい」

サキさんによる点検とリゼちゃん、青山さんによる見送りを受けた。

「でも大変ねえ、人探し。マヤさんのお友達だったっけ？」

「うん。だいぶ前に別れてからずっと探してて、ようやく最近あの街にいたって分かったんだけど、マヤちゃんがちょっと体調を崩しちゃったから、みんなです探すのを引き受けて。先々週やつと会えたから、今度またちょっとお話をして、マヤちゃんに会ってもらったり、お手紙でも送ってもらえたらなつて」
大筋では間違っていない形でうまく話をしつつ、今回の目的を改めて伝えた。

「そうなの……。もう見つかっているんだつたらあとちょっとね。応援して

るわ」

「頑張つてきます！」

「ココアさんがお休みの分は私と凜ちゃんが応援に入りますので」

「青山さんも凜ちゃんさんもおしごとは大丈夫なの？」

二人が代わりに入ってくれるのはとても嬉しかったけど、ちよつと気になつていたことを質問したら、明らかに青山さんの目が泳いだ。

「ええ、先日本の原稿がひとつ仕上がったのは良かったのですが……。凜ちゃんが疲れて、私と一緒にする仕事をダブルブッキングしてしまつたようです」

「それって大丈夫だった？」

「だいじよばないです。二人で頑張つて解決できましたけど、職場全員のお姉さんな編集長さんから『しばらく休んできな』って暇を出されたそう

です」

「ひよつとして凜ちゃんさんクビ？」

その疑問には否定が返ってきた。

「いいえ。有給休暇がたっぷり残ってるからこの機会に使ってくれ、とのとだつたみたいです」

「そうか。じゃあラビットハウスで働かずに休んだほうがいいんじゃないか？」

「そう思ったのですが、凜ちゃんが動いていないと落ち着かないそうなので、タカヒロさんとサキさんをお願いして、ラビットハウスでお仕事をさせてもらうことになりました」

「そうだったんだ……。じゃあよろしくお願いします！」

青山さんは両手で小さく丸を作って応えてくれた。

「ええ。お姉さんに任せなさい、です」

「あ、私のセリフ取られた!」

「ココアはそろそろ姉から解放されような……」

翌朝、寝坊せずにきちんと起きることができて、駅で千夜ちゃん、シャロちゃんと合流した。二週間前はだいぶ重苦しい雰囲気だったけど、今回は先の見通しがちよつと明るかったので、電車内での会話が弾んだし、朝ご飯のサンドイッチもいつもより美味しく感じられた。

「ふーっ、二週間ぶりの到着!」

「こんなに短い間隔で来るとは思わなかったわよね」

「ええ。今度は是非とも作戦を成功させなきゃね」

三人で小さく円陣を組んで気合を入れた。

「さて、そろそろ部下さん達もこの街に着いて、メグちゃん捜索を始めてくれる時間だと思うけど……もうちよつとあるね」

ちよつと一息入れようと踵きびすを返したところで、遠くから声を掛けられた。

「あの」

「はい、つて、メグちゃん!？」

「はい。お姉さん、お久しぶりです」

尋ね人があちらから来てくれた。クールビューティーな表情に、前回よりもさらに少し分かりやすくなつた微笑みを添えて、ぴよこん、と頭を下げた。

「二週間後でしたし、木組みの街からの一番電車がこの時間に着くから、ちよつと待ってみようかなつて思つたんです。そしたらお姉さん達にまた会えました」

「これは奇跡だよ！　ねえ千夜ちゃんシャロちゃん！」

「そうね〜」

「すごい偶然よ。でももしこの時間に会わなかったら、今日はどんな予定で過ごす感じだったの？」

「そうですね、みなさんが来るのをずっと待ってたかもしれないません」

シャロちゃんの質問にも、クールビューティー・メグちゃんは穏やかな口調で返事をした。

「ほえー……やつぱり一番電車で来てよかった！」

「ありがとうございます、お姉さん」

メグちゃんとすぐに出会えて、第一目標はあっさり達成された。ただ、次の作戦を進めるにあたって、いくつかメグちゃんのまわりの情報を知る必要があった。いろいろと事前に調べたり、リゼちゃんから聞いたり、部下さん達に

調べてもらったことがあるけど、それを知らない体ていで聞いてみることにした。

「そう言えばメグちゃんって学生さんだっけ？」

「はい。小学六年生です」

「おお、若い！ 私と千夜ちゃんとシャロちゃんは高三！ じよしこーせーです！」

「高校生なんですね。とてもお姉さんですね」

「はい、みんなのお姉ちゃんです！」

「ココア、『お姉ちゃん』の単語にがつつきすぎないの」

シャロちゃんにたしなめられた。身体の姿勢的にもかなり前のめりになってしまっていたので元に戻した。

「小学生ねー、なるほど。となると、こういう大都会を一人で歩くのって大丈夫なのかしら」

「はい。その……遠くから、ボディーガードさんが見守っているそうです……」

「ボディーガード？」

メグちゃんから聞くとは思わなかった単語にかなり驚いて反射的に聞き返してしまった。すると、メグちゃんは少し気まずそうに話を続けてくれた。

「この前、ちよつと変わった人とトラブルっぽくなっちゃって……初めはお父さ——父が、いろいろな場所への行き帰りにいつもすぐ横につく、みたいなことを言ってたんですが。母がそれでは息苦しくなるからダメだ、つてことで、ボディーガードさんをお願いしてみたんです」

「ほえー」

十中八九、リゼちゃんとマヤちゃんのことには違いなかった。トラブルだと認識されてしまっているのは気の毒で、早くメグちゃんに記憶を取り戻してもら

う必要があった。とはいえ、ガードがガチガチに固くなつてしまわなくて良かった。

「ですから、遊んだりするのは自由です。お姉さん達のこと母には話して、もし会ったら一緒にいろいろする許可ももらってます。……そうだ、会えたことを報告しなきゃ」

メグちゃんが持つていた小さいバッグからかわいらしい見た目の携帯電話を取り出して、お母さんに電話をして、二言三言話をするのを横で聞いていた。

「——うん。わかった」

メグちゃんが電話を切り、こちらを向いた。

「これで自由になりました。今日だけじゃなくてしばらく」

「しばらく？」

「はい。夏休みなので、習い事もちよつとお休み、です」

メグちゃんは先ほどよりさらに明らかな微笑みを浮かべて頷いた。

メグちゃんと一緒に、まずはいつものホテル・ロイヤルキャッツへ向かった。今回は行き方が分からなくなるようなこともなく、そもそもその場所をきちんと知っているメグちゃんが同行してくれていたので、今までの中で一番速くホテルにたどり着けた気がする。

「荷物も置いたし、さてどうしよつか？」

「メグちゃんが一緒だし、ここは地元の人に街を案内してもらおうってことでうかしら？」

シャロちゃんの提案を、クールビューティー・メグちゃんは二つ返事で了承してくれた。

さつきはトラムに乗って来た道を、今度はゆっくり歩きながら街の中心の方

に向かった。

「ここ、本当にすごい街だよ。色々なものがあふれているっていうか！ 木組みの街も好きだけど、ここもとてもわくわくして好き！」

「そう言ってくれると嬉しいです。いつも同じところを歩いているだけだと、自分の住む街の良さって、なかなか答えられなくて」

「小学六年生くらいで語れる子はなかなか少ないと思うけど……」

しばらく進んで、立派な劇場風の建物の前を通りかかった。シャロちゃんがそれを観て目を丸くしていた。

「あら、ここ……」

「オペラ劇場です。ちょうど今はクラシックバレエの公演もあつていたりします」

「へえー」

私がちよつと間の抜けた声をもらしている横で、シャロちゃんは少し考え込んでいた。

「……ここつて、観るとしたらドレスコードか何かがあつたりするのよね？」

「気になりますか？ でしたら今日はちようど『初心者におすすめ！ カジュアルなりラックス観劇講座』の日ですから、私達の服装でも気にせず入場できます。入場料もお手頃です」

「おおー、メグちゃん詳しい」

その言葉に、メグちゃんは少し遠い目をして、少し悲しそうな笑みで答えた。

「はい。バレエを習っていますので。……スランプでお休みしていますけど、観るのは好きですから。ご希望でしたら案内します。あと一時間もしないうちに始まります」

メグちゃんの誘いに乗って、私達は劇場に足を踏み入れた。

公演のタイトルの通り、とてもリラックスした感じで、多くの人が知っている演目を解説付きで上演してくれた。夏休みの始まりということもあって親子連れが多くて、みんな目を輝かせていた。すごかった。この感動を表すために語彙ごい力をもっとつけなければと決意した。

「すぐく……、すぐく良かったよメグちゃん!!」

「ありがとうございます」

「すごいわよね……。だいぶ前にこんな感じで誘われて観たことがあったけど、夜ふかししてたせいで公演中に寝ちゃってて、もったいないやら申し訳ないやら……。、という苦い思い出があつて」

「ふふつ、ありがちつてよく聞きます」

「そうなの……」

ちよつとほつとした風のシャロちゃんを見て、何か思い出したのか、メグちゃんが続けた。

「……これはたぶん、私が夢か何かで見た話だと思うんですけど、シャロさんの話みたいなの記憶があります。夢の中で私は中学三年生くらいで、バレエに興味を持ってくれたお姉さんを劇場に誘うんですけど、なぜか私がドレスコードをすっかり忘れていて、そこをお姉さんに助けられて全部揃える、っていう夢でした。……ちなみにオチは、お姉さんはいつの間にか寝ちゃってた、というものでした。なぜか綺麗に覚えているんです」

その言葉に、シャロちゃんのはつとなつて口に手を当てた。たぶん、シャロちゃんとメグちゃんがバレエを観に行っていた時のエピソードに違いなかった。

「……なんだか、とても愉快なお姉さんね」

シャロちゃんが若干じちちよう自嘲気味の言葉をもらした。それに対して、メグちゃんは首を振った。

「ううん。夢の中では、私はそのお姉さんにとっても助けられたんです。中身は全然覚えていないけど、何か、私の将来の夢につながるようなアドバイスをくれた気がするんです」

「そう……」

シャロちゃんがまんざらでもなさそうな表情に変わった。その後ろでは千夜ちゃんがなぜか腕を組んでしたり顔で頷いていた。

観劇のあと、近くのパン屋さんでいくつかパンを買い、近くのコーヒースタンドでコーヒーを買って、公園に向けて少し散歩した。千夜ちゃんとメグちゃん

んが少し先を歩き、その後ろで私とシャロちゃんが並んだ。この機会に、さっきの話について確認してみた。

「ええ。確かにあれは私とメグちゃんとかバレエの公演を観に行った時の話よ。ほぼそのまま」

「なるほど……元の世界の記憶を思い出している、ということでもいいのかな」
「そう思う」

大きな一歩だったらしい。この調子で記憶を取り戻していきたい。

公園でくつろぎつつパンを食べ、コーヒーを味わって、みんなでお喋りしていたら、だいぶいい時間になっていたのでメグちゃんとお別れした。

「次は火曜日に会いたいです。お姉さん達は大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ！」

待ち合わせは、火曜日の朝十時に大きな駅の前にした。念のためメグちゃん

の連絡先を教えてもらった。メッセージのアプリは使えないみたいなので、メールアドレスを聞いておいた。

「さようなら。またよろしくお願いします」

メグちゃんは笑顔で手を振りつつ帰っていった。

ロイヤル・キャッツへの帰り道。

「このメグちゃん、なんだかだいぶクールな感じから温あたたかな感じになってきたみたい」

千夜ちゃんの感想に私とシヤロちゃんは頷いた。

「元の世界の記憶が戻りそうな感じもあるし、このままうまく進むといいわね」

「うん！」

今日のレポートをリゼちゃんに送って、その後グループ通話でいろいろ成果

報告をした。とても喜んでくれた。ただ、この成果をマヤちゃんに伝えるのは後回しにすることを決めた。

『あまり考えたくないんだが、自分がこつぴどく拒絶された相手がココア達相手には心を開いているという事実はちよつと、今のマヤが受け入れるには重すぎる気がするんだ。……実は私もちよつと意気消沈している』

「うん……」

『だから、すまないが最後までココア達に頼むことになりそうだ。今のところマヤはそちらに向かおうとする意思表示はしていない。何かあつたらすぐに連絡する』

「わかった。引き続き任せて」

次にメグちゃんと会うまでの数日は、メグちゃんが記憶を取り戻すきつかけ

となるような場所を、前の旅行の時の写真を参考にしつつ思い出すのに費やした。途中からは七割方ただの観光になっていたけど、あの時にまだ十分知らなかった都のことをもっと知ることができたのは良かった。

☆ ☆ ☆

火曜日。私達の前に現れたメグちゃんへのヘアスタイルを見て驚いた。よく見慣れた天然ウェーブ、それをツインテールの形に結んだ、本当によく見慣れた姿だった。

「ストレートじゃない髪型にしてみたいと思ってやってみました。もともとこ

んな感じにウェーブがかかるんです。あと、なぜかこの髪型が思い浮かんだので、初めて結んでみました」

「おお……なんだか別の可愛さが現れてきたよ！」

その言葉を聞いたシャロちゃんがため息をついて、その後私を鋭い言葉で刺した。

「ココア、なんだか変質者みたいよその言葉」

「ガーンッ！」

ショックを受けた。本日のココアは閉店です……。

今日は主にお店が立ち並んでいる方を歩いて、ウィンドウショッピングをすることにした。例によって陶磁器を取り扱っている食器のお店でシャロちゃんが動かなくなった。

「ああ……やっぱり木組みの街にはない珍しいものが……じゅるり」

「シャロちゃん、よだれが垂れそうになっているわ」

美しいカップに心を奪われてしまっているシャロちゃんを千夜ちゃんが甲斐がしくお世話していた。

「シャロちゃん、いい感じのお皿とかカップを見るといつもあんな感じになるんだ」

「……なんだか、分かる気がします。美しくて心奪われるものが、私にもあるから。ただ、それが思い出せていない気がします」

「そうなの？」

「はい。もの、というより人かもしれない。いつも私を引っ張って、楽しい世界に連れてきてくれる人、私にとって憧れのおひさまみたいな人です。……いるはずなんです。思い出せません。もしかしたら、また私の夢の中に出てきただけなのかもしれません」

メグちゃんにとってのその人には、十分すぎるほど心当たりがあった。

「そうだね。そういう人って、案外近くにいるかもしれないよ」

「そうでしょうか」

「うん、きつと。お姉ちゃんが保証する」

なぜなら、この世界にマヤちゃんがいるから。

「そうですね。ココアさんが言うなら、諦めずに探してみます」

お昼ご飯を食べるためにレストランに入って、ちよつとトイレに立ったところでリゼちゃんから電話が入った。

『大変だ。マヤがまた家出した』

「えっ!？」

『幸い、親父の部下たちが捕捉ほそくしてくれて、乗った列車を特定して追跡してい

る。おそらくそつちまで行く気だ』

「電車は何時頃着きそうなの？」

『夕方の六時三十五分らしい。ロイヤル・キャッツに向かう可能性が高いが、確実に捕獲ほかくするには駅で待ち構えていたほうがいい』

「わかった」

席に戻って美味しいスパゲッティを食べた後、メグちゃんが席を立ったタイミングで千夜ちゃんとシャロちゃんに伝えた。

「そんなに遅い時間までメグちゃんと一緒にいることはないと思うけど、もし一緒にいる時にそれくらいの時間になったら、メグちゃんを駅から離れる方向に誘導した方がいいわね」

「その時は私がマヤちゃんを保護しに行くから、千夜ちゃんとシャロちゃん、よろしく」

「ええ」

「わかったわ」

しかし、せっかくの役割分担が役に立つ前に、作戦は致命的に失敗した。

夕方、五時三十分。少しずつ日が傾き始めた頃、私達一行はちょうど駅前まで来ていた。街を散策して少し買い物をして、そろそろメグちゃんとお別れる時間だった。

「メグちゃん、今日も一日ありがとう！」

「どういたしまして。私もみなさんと一緒に街巡りができて楽しかったです。

……：そういうえば皆さんは今週土曜日に帰られるんですよね？」

「うん」

「でしたら、金曜日の夜に川のところで花火が上がるので、是非見て行って下さい。案内します」

「ありがとう！ その日はお世話になるね！」

「はい。よろしくお願ひします」

メグちゃんと握手をして別れかけた時、視界の端で誰かが物を落とすのが見えた。その人が立ち尽くしていたので、ちよつと気になってそちらを向いたところ、そこにいるはずのない人がいた。

「……マヤちゃん……？ どうして……？」

マヤちゃんの表情はよく見えなかった。そして、落とした荷物もそのままに人混みの中に駆け出して行ってしまった。

「ココアさん、どうしました？」

「え！ あ、ちよつとトイレ行ってきます！ メグちゃん今日はありがとう！」

メグちゃんを千夜ちゃんとシャロちゃんに任せて急いで後を追う。その時、リゼちゃんから緊急連絡が入った。

『すまん！ マヤが途中で列車を乗り換えていたらしい！ そつちに五時半に着いた！』

「もうマヤちゃん見つけた！ あと……メグちゃんと別れるところ見られた」

『何だつて……かなりミスったな……』

「とにかく追いかけるから！」

それから数分、マヤちゃんが息を切らせて立ち止まりかけたところを後ろから捕まえた。マヤちゃんが抵抗することはなかった。マヤちゃんは震えながら、絞り出すように^{つぶや}に呟いた。

「ごめんココア、ここまで勝手に来ちゃった。……ごめん。私もうどうしたらいいかわかないや……」

「マヤちゃん……」

もう歩く気力さえ無くなってしまったマヤちゃんを連れて、ロイヤル・キャッツに帰還した。千夜ちゃんとシャロちゃんも帰ってきていて、やはり表情は重かった。

ひとまずマヤちゃんも泊まるよう手続きをして同じ部屋に来てもらったけど、それから部屋の片隅にうずくまり、そのまま動かなくなった。

翌日は雨だった。特に出かける予定はなかったし、マヤちゃんが来ていて、元気がないままで動けるような状況でもない以上、独りにして外を出歩くわけにも行かなかつた。少しだけ話をしたけど、当然弾むはずもなかった。

午後にはリゼちゃんから連絡があり、リゼちゃんも明日朝に木組みの街を発つてここまで来るとのことだった。今日の新たな展開はこれだけで、とても重苦

しい一日が終わった。

さらに次の日、木曜日。昨日とは打って変わって天気が良くなったけど、部屋の空気は相変わらず重苦しかった。そんな中、メグちゃんから連絡が入ったため、私一人で公園に向かった。

待っていたメグちゃんの様子は硬かった。

「突然呼び出してすみません、ココアさん。……ううん、ココアちゃん」

「！」

「全部思い出したの。どうして私が高校生じゃなくて小学生なのかは分からないけれど、全部、思い出したよ」

「メグちゃん……」

抱き合って、ようやくの本当の再会を祝った。

「マヤちゃんはこっちに來てるの？」

「うん。でもとてもショックを受けたままで、全然元気がなくて、ホテルにこもったままになってる」

「私のせいだよね……不審者だつて思っちゃつて、リゼさんとマヤちゃんを振り払っちゃつたから……ひどいことも言っちゃつたから……」

「記憶が戻つてない状態だったし、いろいろと仕方がないところはあるかも」

「うん……だからきちんと謝りたい。これからもずっと一緒にいたいから」
「分かつた」

リゼちゃんが朝一に出てこちらに向かっているの、そろそろ駅に着く時間だった。メグちゃんと一緒に駅に行つて、リゼちゃんを出迎えた。

「メグ！」

「リゼさん！」

二人とも半分ぶつかるように抱き合い、あつという間に仲直りした。今からロイヤル・キャッツに行く時にメグちゃんも同行していいか、一応シャロちゃん経由で尋ねてみた。でも返事は芳しくなかつた。

『あともう少し、あと一日、時間がほしいそうよ……』

今日のところは、メグちゃんには出直してもらおうことにした。

再び私だけがホテルに戻ると、入口のところでき夜ちゃんに手招きされ、レストランに誘導された。そこにはマヤちゃん以外の全員が揃っていた。

「マヤのことだが……このままだと閉じこもったままになりそうだ」

「どうしたらいいのかしら」

リゼちゃんとシャロちゃんの言葉に、私は一言、ここまでいろいろ考えた結果の案を出した。

「メグちゃんに太陽になってもらおうと思う」

みんなに作戦の中身を伝えた。まだメグちゃんの同意は取り付けていないけど、百パーセントこの作戦に乗ってくれると信じている。

「わかった。多分それがいいと思う」

「何だか、お姫様と勇者みたいな感じ？」

「これが一番いい作戦かも。普段の性格的には逆な気もするけれど」
みんなからも前向きな返事を受けたので、メグちゃんに電話で依頼をした。

こちらが話し終わる前にかぶせ気味に返事をくれた。

『やるよ。マヤちゃんのもとに一直線に行けばいいんだね』

「うん」

『わかった。朝九時に行くから』

最後の作戦が始まった。

翌日、金曜日。抜け殻のようになってしまっているマヤちゃんは、力が少しも残されていないようなうなだれ方をしていた。一応、メグちゃんに会えそうか聞いてみたけれど、首を弱々しく横に振るだけだった。

みんなが徐々にさり気なく部屋の外に出てロビーの方に移動し、マヤちゃんだけが中にいる状況を作ったところで、メグちゃんが来た。

「マヤちゃんのこととは任せて」

見た目は小学生、中身は元の世界と同じ高校生なメグちゃんの力強く頼もしい言葉に、私達も頷き返した。

部屋の前までは代表して私だけが行って案内した。

「色々聞こえてくると思うけど、私とマヤちゃんが出てくるまでは外で待つて

て欲しいの。お願い」

最後に軽く頷き合い、メグちゃんがドアノブに手をかけた。

「たーのもー！ー！ー！ー！ー！！！！！！」

メグちゃんが大声とともに部屋の中に討ち入った。ドアが閉まってしばらく経ち、隙間からドタバタする音と、何やら激しい声と、しまいにはビンタの音としか思えないような音さえ聞こえてきた。……そして、二人の泣き声。

さらにもう少しだけ待って、ようやく扉が開いた。小さいメグちゃんに、それより少しだけ大きなマヤちゃんが手を引かれて出てきた。二人の頬は真っ赤に腫れ、涙の跡もはつきり残っていた。

「お待たせ、ココアちゃん」

メグちゃんの言葉に、私は最高の祝意をもって返した。

「おかえり。メグちゃん、マヤちゃん」

その後、ホテルはちよつとしたお祭り騒ぎになった。記念にホテルでささやかなパーティーでもしようかと思つたところ、「パーティーは祝意の大きさにふさわしいものでなければなりません」と支配人さんが宣言して、たくさんお料理を用意してくれた。半分くらいは私、リゼちゃん、千夜ちゃん、シャロちゃんも手伝つた。

「メグちゃんの復活を祝して、あと、六人目まで揃つた記念に、かんぱーい！」
「かんぱい！」

一時はどうなることかと思つたけど、マヤちゃんもメグちゃんも元気になつて、こうやって合流できた。後は「まじゅつ」でメグちゃん的环境と、マヤちゃんの年齢を揃え直すと、二人の搜索は完結。

「ねえねえメグちゃん、部屋の中でだいぶドツタンバツタンしてた気がするんだけど、何やってたの？」

「ん？ 殴り合いのケンカだよ？」

「うええええっ!？」

およそメグちゃんから出るとは思えないバイオレンスな回答に腰を抜かしてしまった。そこにマヤちゃんがやってきてぶーぶー抗議の声を上げた。

「メグったらひどいんだよ！ いきなりあの部屋に入ってきたら私を持ち上げてベッドの上に放り投げたんだ！ それから言い争いになって、ボコボコ叩きあつて、最後にお互いにビンタして倒れて……やつと泣いて、笑えた」

「……マヤちゃん、まだ小学生の身体の私に中学生パワーで掛かってきたよね」

「メグだつて小学生の身体とは思えない馬鹿力でタツクルしてきたじゃん。お

腹を丸ごと吐き出しそうになった」

「むー」

「むーっ」

しばし睨み合い、そしてどちらからともなく笑い始めた。

「こぶし拳で語り合う、か。何だか少年漫画みたいだな」

「でも、さすがにほっぺたがどつちも真つ赤に腫れるようなバイオレンスはやめましょうね……」

「ほほえま〜」

「……千夜は時々妙なところで肝が据わっているわね」

パーティーのさなかに、ココアお姉さん（仮）にも連絡がついた。

『もうすごい！ いろいろ準備とかもするから会社も勢いで早退しちゃった！』

頑張れ来週の私!!』

「うん、がんばれー」

来週間違いないと泣いていそうな並行世界の私に一応エールを送った。

『今夜！ 早速だけどマヤちゃんとメグちゃんをまとめて元の世界通りに揃え直すよ!』

「場所はどうするの?」

『メグちゃんなんかいいところ知らない?』

「うーん……あそこはどうかな? なんかケーブルカーに乗ってみんなで登った山があったよね?」

「そういえば……」

前の旅行で、最終日の夜に行った山のことかな。

『よしそこにしよう!』

「なんか随分気が早いな姉ココア」

『何だかそつちに気の集まりみたいなものを感じるんだよね。世界を揃え直す「まじゅつ」にとつておきな感じ。今日何かあるの?』

「花火大会はあるけど……そのせい?」

『そうかも。じゃあみんなも花火を見たいと思うからその後で! あつまずい、課長から電話——』

かなり慌ただしく通信が切れてしまった。

「……じゃあ、最後に高いところから花火を見よう!」

夕方、ホテルをチェックアウトしてその足で山に向かった。以前チノちゃんの『王の命令』で来たところだけど、もちろんチノちゃんはいない。

「おお……」

「いつ見ても綺麗よねここ。本当に宝石みたい」

あたりはだいぶ暗くなり、街の灯りが輝き始めていた。今日の花火大会はかなり大きめらしく、高いところから見ようというお客さんで結構混んでいた。特にカップルが多かった。

「そろそろ始まるよ」

メグちゃんの呼びかけにみんな集まって、街の方を見た。眼下には数々の建物が立ち並び、その中を流れる川には、街の名前の通りの数多くの橋が架かっていた。そこから光がひとつ打ち上がり、大きく花開いた。それからワンテンポ遅れて、音が轟いた。

「おお……！」

「これだけ離れたところから見てこの迫力なら、前みたいに橋のあたりまで行ったら、もつとすぐく見えるのかな」

「そうだな……」

せっかくなので花火の写真をスマートフォンで撮ろうとしたけど、やっぱり遠くて、あまり大きく写せなかった。

一時間続いた花火が終わり、だいぶ人が帰ったところで、ココアお姉さん（仮）からの連絡が届いた。

『何とか仕事は倒したよ……。でもちよつと時間がないから、手短かにパワーだけでやっちゃうから。みんな飛ばされなくてね！』

向こうの私がおのすごく物騒なことを言ったので、慌ててみんなの手を取り合って固く握り合い、ひとつかたまりになった。

『行くよ！ 3、2、1、ファイヤー！』

全身に強い圧力を受けて、一気にどこかに飛ばされるような感覚に襲わ

れた。

数十秒後。

空気の感触が変わったと思ったたら、芝生に半分叩きつけられるような感じで落ちた。そしてその上からみんなが降ってきた。

「きゃっ」

「わわっ！」

「がはっ……みんなちよつとど、ごふっ！」

クリティカルヒット。ステッキにやられずに済んだと思ったたら全員からボディーチェックを食らってしまつて大ダメージを負った。

「わーっ!? ココア大丈夫!？」

「大丈夫ココアちゃん!？」

私を覗き込んで心配してくれるマヤちゃんとメグちゃんが、見慣れた高校生サイズに戻っていた。

「ここは……ラビットハウスの裏庭か？」

「随分ダイレクトに帰ってきちゃったわね」

「ええ……」

足掛け一か月近くにわたる搜索と取り戻しの作戦が、ようやくまたひとつ終わった。今日はみんな疲れているので解散し、また明日再集合することになった。裏庭から表に出てきた時にちょうどサキさんに出くわし、いきなり現れた私達一行にとっても驚いていた。

みんなを見送った後、空を見上げながら、リゼちゃんと話をした。

「ようやく六人揃ったね」

「ああ。だいぶ長かった」

「でも、まだこれからだね」

「……そうだな」

未だ行方が掴めていないというキノちゃん。きつとどこか知らないセカイで、またひとりぼっちに違いなかった。

かつてみんなを捜し始めた時に誓ったことを、もう一度誓った。

キノちゃん。もう少しだけ待ってて。

必ず、早く、助けに行くから。

（『セカイにひとり』下巻に続く）

あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦と申します。インターネット上ではより詳しく識別するために「麦（穀物P）」と名乗ったりしています。

「セカイにひとり」中巻第四号をお送りします。中巻が一章単位でどんどん分割されるといふ執筆の失敗を多少なりとも立て直すべく、今回は二章進め、そして中巻を完結させることができました。

読者の皆様もお気づきかと思いますが、中巻はそれぞれ合流する人物のシンボルカラーに従った表紙色にしてみました。

第一号（第四章） 紫……リゼ

第二号（第五章） 緑……千夜

第三号（第六章） 黄……シャロ

第四号（第七章・第八章） スカイブルー＆サーモンピンク……マヤ＆メグ

もし今回第八章の執筆が間に合わなかったならば、この第四号の表紙がスカイブルー単色を基調としたものとなり、サーモンピンクを基調とした表紙の第五号が来年夏に出る予定でした。

各人の関係性を考えた時に、元々は千夜とシャロ、マヤとメグをそれぞれ対にしてひとつの巻にまとめることを意図しましたが、千夜とシャロの時点では

果たせませんでした。今回は実質的に連続しているので、無事に対となる章を収めることができてほつとしています。

いよいよ下巻、チノ搜索編が始まります。チノちゃんを長い期間ひとりぼっちにして大変申し訳なく思います。下巻は間違いなく分割されてしまいます。プロット段階では六章構成を予定していますので、可能性としては四分割があり得ます。今しばしお付き合ってください。

麦（穀物P）

セカイにひとり ―遠く散ったみんなを探して― 中(四)

著 者：麦(穀物P)

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二四年(令和六年)十二月二十九日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokototo.jp/>)